
名も無き記念日

Lawlite

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名も無き記念日

【Nコード】

N2102Q

【作者名】

L a w l i t e

【あらすじ】

僕と誰かの名も無き記念日のハナシ。

プロローグ

ふと気づく。

自分がどこにいるかを。

（ここは…）

青々とした秋空には

雲は一つも見当たらず

澄み切っている。

周りには紅く色付いて

何だか恥ずかしそうに

お互いにサラサラと

風に揺られる木々。

葉っぱがひらりと

風に揺られて中央の

池に優しく着水。

同心円状に波がたつ。

僕は歩き出した。

（ここは…）

時々、自分が夢の中に

いることに気づく。

しかし、ここは実在する。

だけど、今は夢の中だ。

歩き出した僕は

うつむいている。

芝生達は時折

痛そうに身を縮める。

（ごめん）

自然と呟いている

自分にちよつと

微笑んでしまう。

来た道を見ると

みんなが痛そうに

しているのが見えた。

今度はゆつくりと

体重をかけないように

歩き出した。

池には誰もいない。

池を囲む木々に

隠されてここに池が

あるなんて分からないの

だろうか…。

他とは隔絶された世界。

一際大きい木。

僕はその前で止まった。

上を見てみると

空はまだ青い。

視線を元に戻してみる。

木の根本には

二人座りの木製ベンチ。

肘掛けつき。

落ち葉を払い、

腰掛けてみる。

二人用なので
ベンチにはまだ空気が
ある。周りにはまだ
人が現れる気配はない。

僕はゆっくりと
伸びをした。
そして池を見ていた。

空はいつの間にか
赤く染まっていた。
水面も夕日に照らされて
キラキラしていた。

肩に温もりを感じる。
左肩をみる。
長い黒い髪。
ゆっくり安心したように
一定のペースで
上下する。
その温もりは
僕と同じ。

僕はそのまま。

安心感に包まれた僕は
眠ってしまった。

眩しさを感じる。

目があけられない。

布団を跳ね飛ばす。

ムクリと起きて

周りの状況を確認する。

（やっぱり夢か…）

別に気落ちしたわけでは
ないが…まだ夢の中に
いたかった。

眩しいのはカーテンが

わずかにサボったせい

だと判明したがもう

手遅れだった。

二度寝はもう無理だ。

25歳の日曜日。

訳ありな夢。

（しかもちようどの
時期か…）

何か縁というか、
何かを感じられずには
いられなかった。

夢は僕の夢だったから…

一週記念 池の噂

サボったカーテンを
恨めしく思いながら
乱暴にしめようとした。
しかし考え直した。
乱暴にしめるには
カーテンにとつては
理不尽だろう。いつもより
恭しく丁寧にしめた。

今日は久しぶりに
ちゃんとした日曜日が
過ぎそうだ。

大学をでて、出版社に
就職できた。今の不況の
最中に希望した仕事に
就けて嬉しい限りだ。
小さな雑誌の新人編集。
締切はいつもギリギリ。
担当をしている

4コマ漫画は結構な人気らしいというのだから、そこそこだろう。

漫画家は今回は珍しく
締切2日前に原稿を
描き上げていた。

よって今日は純粹な

休日を送れると昨日は
ウキウキしながら眠った。
午前中はずっと寝てようと
考えていたが、
妙な夢とわずかな
サボタージュにより早々に
眠気が覚めてしまった。
まだ7時を少しばかり
過ぎたところだ。

ベッドから起き上がり
やかんに水を入れる。
蛇口からはキラキラと
気持ちよさそうに水が
でているが、寝ぼけた
目には何の印象も
与えなかった。
やかんをガスコンロに
置いて、火をつける。
一人暮らしの部屋には
ベッドとテーブル、
本棚、机ぐらいしかなく、
すっきりしている。
普通なら、25歳の男が
一人暮らしならば
もっと汚い。ゴミ箱には
何ヶ月前の生ゴミが
底で腐臭を放ち、カビて
いるに違いない。

綺麗に片付けた部屋は
長い一人暮らしの
経験によるものだ
としみじみ思った。
辿り着いた結論は
「自分が掃除しなきゃ
汚れない放題」だ。

テーブルの前に
座ると伸びがしなくなった
手足を伸ばすと
どこかの骨が鳴った。
少しだけだるさが
抜けた気がしたが
まだまだだった。
ボーっとし始める。
今朝の夢について
考え始めた。

あの温もりは
一体何だったんだろう？
僕は一体何をみて
何をすべきだったんだろう？

未だに答えは出ない。
ただわかるのは
夢は僕の夢であつた
ということだ。
求めていたものだ。
名もない日常の日々に

僕は懂れていた…

そこでやかんが
水が沸点に達したことを
やかましくピ〜と
告げた。僕の思考を妨げる。
やれやれと立ち上がり
火をとめる。満足げに
静まるやかんを持ち上げ
インスタントの
コーヒーが入った
マグカップに湯を
注ぐと部屋に独特の
匂いがたちこめる。
トーストを焼き、
簡単な朝食をとる。
熱いコーヒーで
眠気はどこかの空に
飛んでいった。
予定は特にないことに
気がついた。
読みたいと思う本は
最近出版されてない。
観たい映画もなく、
遊ぶ友人達はまだ
夢の中だろう。
わざわざ連絡をしてまで
遊びたいと思わなかった
(それなら…)
急に思い立った。

シャワーを浴びて
ヒゲも剃り、出掛ける準備をする。特には何も持たず、財布と携帯
と部屋のカギぐらいだ。

部屋を出て、カギをしめる。
日曜日の朝はまだ
静かであった。

それはちょうど
高校2年の夏休みに
入った頃だ。

その日はカーテンは
ちゃんと仕事をしてたが
僕は起きていた。

7時に起床。

体内時計は夏休みを
知らないまま動いた。
いつも通りの日曜日。
金曜日には終業式が
あった。校長や教頭は
無味乾燥な話ばかりで
皆が蒸し暑い体育館で
うんざりしていた。

多分、校長や教頭は
自分達が長いこと
説教をしなければという

一種の使命感を
持っているのだろう。
それは迷惑な話だ。
自分達の学生時代を
振り返ってもらいたいものだ。
終業式は終わり
学生は皆がそれぞれの
夏休みを迎えた。

ベッドから起き上がり、
カーテンを勢いよく
開けると朝日が差し込む。
眩しくて目を細める。
どこかで鳥のさえずり。
まさしく朝だ
と言わんばかりの
ありふれた朝だった。
朝食をつくる。
磁石でメモが貼ってある
冷蔵庫を開けて
中身を一通りみる。
いつもは適当だが
日曜日の朝だけは
少しでも手間をかけて
つくっていた。
昨日安かった鮭と
豆腐と大根を取り出す。
鮭を焼き、豆腐と大根で
味噌汁をつくる。
炊飯器でご飯を炊く。

そうだと思い出す。
冷蔵庫を再び開けて
ひじきを取り出し
煮物をつくりはじめる。

ものの数十分で
朝食を完成させる。
皿や茶碗に盛り付ける。
それぞれが忙しそうに
湯気をあげている。

テーブルにつき
朝食全体をみる。

野菜がないように
感じた。はしとコップを
キッチンに取りに行くと
野菜ジュースが

あったことを思い出す。
猫舌な僕は熱々の味噌汁に
悪戦苦闘しながら

いつもより二倍近い
時間をかけて朝食を
食べた。小さいころに
よく言われた

「よく噛んで食べる」を
完全に無視した朝食は
苦勞してつくつてためか
いつもより少しだけ
美味しく感じた。
さっきまで味噌汁が

入っていたお椀は
名残惜しそうに
まだ湯気を出していた。

食器を片付けて
洗剤とスポンジで
洗う。一年間の成果だろうか、
最近は少しの洗剤で
多くの食器を洗える。
成長した自分に感心する

全部を洗い終わり、
乾いた布で拭いていると
チャイムを鳴らす音が
聞こえる。

玄関に行き、ドアを
開けると65歳ぐらいの
女性が立っていた。

「いつまで寝ているの？
学校は？」と心配そうな
表情と声をして
聞いてくる。

「今日は日曜日だし、
学校はもう夏休みです。
だからゆっくりして
いたんですよ、小母さん」
彼女は僕が住んでいる
アパートの大家さんで
よく料理のあまりとか
譲ってもらった。

とても親切で
世話をするのが
大好きな人だ。
アパートの一室で
同じように一人で
暮らしている。

大家さんの後ろから
ひょいと小さな男の子が
出てきた。

「お兄ちゃんも
夏休みなんだ！！」

じゃあ一日中
サッカーして遊べるね」

小さな男の子は
大家さんの孫で
小学2年生。

遊びたい盛りで
土日はいつも
おばあちゃんの
アパートに遊びに
来るのだった。

「ダメ。まずは
宿題をやってから」
そう言われると
膨れっ面をして
「え〜」という。
「起こしちゃって
ごめんなさいね」
と申し訳なさそうに

曲がりかけた腰を
少しだけおつて
僕にいう。

「大丈夫です。
もう起きていたから」

「そうなの。良かった。
休みなのに偉いわ」

じゃあ、と言つて
孫の手を引っ張り
部屋に戻ろうと
歩きだした。

「お兄ちゃん！！
宿題やったら一緒に
サッカーしよう！！」

「わかったよ」

微笑みながら返事した。

午前中は一通り
家事に追われて過ごす。
決まってそうだ。
着ていたパジャマを
抜け殻のように脱ぎ捨て
昨日の服と一緒に
洗濯機に入れて
スイッチを押す。
洗濯機が回っている間、
部屋の掃除をして
掃除機をかける。
かけ終わると
洗濯機が音をたてて

止まる。しわしわになつた抜け殻たちをパンパンと引き伸ばし、干す。それと同時に布団も日光浴させる。風がふくと洗濯物は生きているように踊りだす。それはなんだか奇妙なものだ。

家事を終えて

12時ぐらいに昼食をとる。

そして1時30分頃に

僕は本を数冊持つて

部屋を出て公園に向かう。

アパートを出るとき

サッカーをやっている

二人がいた。

「お兄ちゃん！」

先に気づいた男の子が

大きな声で僕を呼ぶ。

大家さんも気づいて

こちらをみる。

「あら、公園に行くの？」

「はい」

「お兄ちゃん、

サッカーは？」

「おばあちゃんと

一緒にやってもっと

上手くなつたらね。

お兄ちゃんは公園に行くの」

「公園？」

「そう。大きな池がある」

「あそこかあ」

男の子は下を向き何か考えたあとに僕に向かって

「あそこつてお化けがでるんでしょ？」

「お化け？」

そんな話は聞いたことがなかったので驚いた。

「うん。奥の小さな池に夜遅くに行くとね、

白い女の人立って泣いているんだって」

つてとなりのクラスのヨツチャンが言ってた、と最後に付け加えた。

「そうかあ」

お兄ちゃん、いつも

そこで本読むけど

見たことないなあ」

しゃがみこんで

目線をあわせていう。

「夜遅くに行かないとダメなんだって」。

お兄ちゃんはいつも

5時ぐらいに帰って
きちゃうからだよ」
それもそうだと
納得した。幽霊は
夜に出ると相場は
決まっているのだ。
「じゃあ、今日は
夜まで居てお化けと
会ってくるかな」
と冗談で言ってみた。
そしたら、
「僕も連れて行って！」
目を輝かせた。無論、
「ダメ！！お化けと
会ったらよう君
オシッコ漏らすでしょ」
大家さんがNGをだす。
小さい子がお化けに
興味をもち、怖がるのは
いつの時代も変わらない
「漏らさないよ！！」
ねえ、お兄ちゃん
お願いだよ」
小動物のような
うるうるした瞳で
お願いされたので
断るのに少しだけ
心を鬼にした。
「大きくなったらな
とポンポンと頭を

優しく叩いた。

「ちえく」と口を尖らす。

立ち上がり、行こうとする

「5時には帰って

くるんだよ。近頃は

何かと危ないからね」

「わかりました」

5時が門限の高校生が

どこにいるか疑問だが

いつも僕は守る。

多分、小母さんの中では
僕はまだ子供なんだろう

夏の空はやけに

青かった。

遠くに入道雲が

見える。どこかが

にわか雨にやられている

こっちは来ないで

欲しいなと思いつながら

10分歩いて公園に

向かった。

今日は夏とは思えない程

過ごしやすい気温で、

太陽も心なしか

普段よりこやかで

あるように見えた。

公園につくと多目的広場に

親子づれが沢山いた。
そこを通り過ぎると、
博物館がある。

中では恐竜の骨やら、
貝の化石やらがある。

昔、ここら一帯は
海だったらしく

サメの歯の化石なんかも
出ているそうだ。

博物館の脇には
バスも停められる

広い駐車場がある。

博物館を見た後に広場で
遊ぶのが近くの小学生の
遠足のパターン

更にそこを抜けると
遊具が沢山ある場所に

出る。そこでは
毎日子供達で

賑わっている。
ブランコや滑り台、

シーソー、ジャングルジムは
勿論、特殊な白い

山のようなトランポリが
人気を博している。

更に奥にいき、

長い林を抜けると
そこに池がある。

一番最初の広場にも

大きな池があるが
そことは違い、
こぢんまりしていて
静かだ。奥過ぎて
誰も来ないのだ。
多分、この公園のここに
池があるなんて
知らない人が
沢山いるだろう。
一人で読書をするには
ちょうど良い場所だった

ひととき大きな木が
池のまわりにある。
そこに誰が置いたか、
二人がけのベンチが
あるから、そこに腰掛け
5時近くまで居て、
子供向けの公園内の
5時の音楽を聴いて
帰るのが僕の日曜の
午後だった。

今日も来てみると
例のごとく誰も
いないので、気ままに
読みふけた。
読む本は決まっていなかったが
だいたい推理小説や
ミステリー、ファンタジーだった。

他人が敬遠しそうな
昔の堅い小説も読んだ。

どの本も自分とは
違った価値観の人生を
歩む。それがたまらなく
面白く、不思議だった。
異なった価値観は
自分では思いつけない。
言うなれば違った人にな
る。それが小説を読むと
出来る。僕はそれが
楽しくて読んでいるし、
勉強にもなる。
読み始めると完全に
物語の中にダイブする。
言葉通りに。
物語という大海の中を
泳いでいき、
一つ一つの言葉の
意味を読み解いていく。
宝を探すようなものだ。
作者がいたいことを
一つ一つかんでいき
冒険していくのだ。
どの海も違ったもので
荒れていたたり、
穏やかだったたり、
汚かったり、

綺麗だったりする。

一度、ダイブしたら
なかなか戻ってこれない
気づくとあつと
言う間に時間が過ぎる。

今日もまだ10分ぐらい、
と思っているうちに
5時がきてしまった。
慌てて準備をして
帰ると大家さんが
待っていた。

「お帰りなさい」

「ただいま」

大家さんは学校の時きも
こうやって待っていて
お帰りなさいの
挨拶をするのだ。

一人暮らしになり、
一年経ったが

もう自分のスタイル、
習慣がついた。

日曜日はこのあと
夕食をつくり、食べて
ゆっくりくつろいだから
風呂に入り、寝る。
それだけだった。

夕食は簡単にパパツと
つくり食べた。

公園で読んでいた
小説がいいところで
5時になつてしまったので
続きが気になつて
しうがなかつた。

10頃に風呂に入り、
ベッドに飛び乗り、
ゴロゴロしながら
読もうと本棚に
手を伸ばす…

が、その小説は
本棚に存在しなかつた。
僕の手は虚空をつかみ、
だらんと垂れた。
玄関に置きっぱなし
なんだろうと思い、
玄関へ向かう…
ない。

（もしかして…）
公園のベンチに
置き忘れたみたいだ。
明日取りに行けば…
と思つたが、先が
気になつて
いてもたつても
いられなかつた。
（取りに行くか）
ドアを開けた。

外は生暖かく、
風がかすかに
吹いている。
月は妙に赤っぽく
光っているが
半分以上が雲に
隠されていたので
薄暗かった。
（いやな感じだ）
と思うと昼間の話を
思い出す。
「女の人のお化け」
怖いものが苦手な
僕は一度身震いを
してから公園に
向かった。

公園の広場に着いた。
電灯はこのあたりには
あるが、奥には
見たことがなかった。
広場と博物館までは
明るく歩きやすかった。
遊具広場はかなり暗く、
その奥をみると
さらに闇が広がっていた
「なんで奥には

「電灯をつけないんだよ」

一人で文句を

言っていた。

勇気を振り絞り

林を抜けて池に出た。

誰もいるわけがない。

無論、一人も。居るのは

僕だけで、あとは

沈黙のなかに

木々は無表情に

立っていた。

歩き馴れたところが

時間でこうも不気味に

なるなんて：

時々、風で葉っぱと

葉っぱがこすれ合う

カサカサという音にも

振り返ってしまう。

僕は極度の怖がりだ。

「女の人のお化け」

耳に何度も

鳴り響く。

抜き足差し足で

いつものベンチに

たどり着くと

そこで一息ついた。

本は何事もなかった

かのようにそこにあっ

たから僕は少し

憎たらしかった。

ベンチに座る。

周りを見してみる。

（やっぱり幽霊なんて
いないじゃないか）

安心を感じた。

よくみると夜の池も

綺麗じゃ…

僕は凍りついた。

視線は一点から

一切離れようと

しなかった。

僕の体はもう

脳の電気信号を

受け付けるのを

やめたかのように

ピクリとも動かない。

何かに縛られているようだ

目線の先には

白い何かがいた…

二週記念 幽霊の正体

生暖かい風が

僕の身体をなめるように
吹き付けた。

僕は寒気に総毛立った。

それは僕だけでなく、

周りの沈黙を守っていた

木や草も寒気に怯える

かのように揺れていた。

その音は僕をさらに

恐怖に追い込む。

池の水面はいつもより

黒々として、世界中の

闇の部分を集めたかの

ようだった。

一度落ちたら

二度と這い上がることは

出来ない死の世界が

そこにはあった。

闇夜の空間に

その白い何かは

浮かんでいた。

みんながみんな、

それに怯えている。

闇でさえも。

その周りには

近寄ることが出来なく、
その周りだけ妙に
明るいのだ。

白い何かはふわふわと
池の淵に沿って確実に
僕に近づいて来る。

僕の危険回避反応により
脳が野生の信号を
受け付けし始める。

「何かヤバイぞ！！！」
スイッチが入った。

パツとベンチの後ろに
隠れる。身をいつもの
二分の一以下に縮めて
見つからないように
全力で息を殺す。

立場は逆だが
獲物を狙う肉食獣だ。
身体が震えるのに
視線は一点を見ていた。

そうこうしているうちに
もうかなり近くまで
来ていた。

最初は輪郭も何も
なかったが、だんだんと
空気との境が出てきて、
形が分かる。

その形は人だった。
更に近くにくる。
顔が確認できた。

少女だ。

少女…なのか？

少女は長い黒髪で

肌が白い。

腕や足は長く華奢で

ほっそりとしている。

今にも折れてしまいそうだ。

足どりは不安定で

ふらふらと歩いている。

死んだことに

気付いた幽霊が

自分の肉体を

探し求めている、

存在しているか、

生きているか、

わからない

ふわふわと軽く

しかも悲しそうな

雰囲気をしている。

顔は俯き、

唇をキュッと

強く噛んでいる。

僕はその姿をじっと
見ていた。

身体の震えはない。
脳は正常に働き始め、
感覚が戻ってきた。
自分でも驚くほど
怖かったのだろう、
シャツが身体に
はりついて離れない。
襟を持ち上げて
肌とシャツの間に空気を
入れるがしつこく
くつつく。

白い少女は
僕には気付いていない。
ベンチの前の池の淵
ギリギリのところで
しゃがみこんだ。
隠れるのをやめて、
音を立てないように
そっと近寄ってみた。

後ろ姿は変わらず
そこあるのか、ないのか
わからなかった。
そして震えていた。
足元の草には
涙がポタポタと
こぼれ落ちていた。
早い朝露に濡れた草は
励ますように

少女の足を撫でていた。
（夢いってこういうもの
なのかな）

僕の心は自然と
警戒をといていた。
ふと何か声を
かけないといけな
いと
考えていた。
更に近寄って
声をかける。

「あの…」

瞬間、少女は
火に触れたかのように
バッと立ち上がると
同時に振り返って
僕の顔を見る。

頬は涙に濡れていた。

少女は反射的に
一歩下がる。

「あつ…」

時が急ぐのをやめた。
少女の身体はゆっくりと
闇夜の死に

落ちていく。

頬の涙は空中に
おいていかれて
ひらひらと舞う。

少女の手を掴もうと
必死に手を伸ばす…

僕の掌が少女の涙を
砕いた。

少女は池に落ちてしまった。

バシャバシャと
手と足をバタつかせて
池を叩く。溺れている。

（助けないと）
周りを見るが
誰もいないのを
確認しただけだった。

僕は池に飛び込んだ。水は気持ち悪いほど
暖かく、身体に
へばりつくような
感じがした。

池が溺れさせようと
必死になっている気がした。

少女に泳いでいくと

無駄に水面を砕くのを
やめて、僕に

しがみついていた。

自分以外の人の重みを
感じた。ちゃんとした
質量があることに

僕は少し驚いてしまった

少女は全力で僕に

しがみついてくるので
痛みに少し僕の表情は

歪んだ。

先ほどまでは

感じることのなかった

全く逆の力で僕の

首や腕を強く

握りしめるのだった。

しがみつかれながら

泳ぐのは厄介で

少女を岸にあげるのに
かなり時間がかかった。

それでも何とかして

無事に救助を完了させた

僕の服はたっぷりと

水と泥を吸っていた。地面に上がった瞬間に

周りが水浸しになった。

少女のも同じようだ。座っている場所に水溜まりができてい
る
白いワンピースが

ドロドロになつて
汚れてしまった。
泥の斑点がつき、
全体も茶色く
染められてしまった。
緊張と興奮で二人共、
息が荒かった。
心臓の鼓動も間隔が
速い。

「だ…大丈夫ですか？」

返事はなかったが
大丈夫ではないことが
息づかいと表情で
分かった。

混乱している。

「どうしよう…」

自分も状況の変化に
対応しきれず、
混乱している。

何かしなければと
考えていたが
うまくまとまらない。
良い考えは出てこない。
5分ぐらい、
びしょびしょの状態で
二人は息を荒くしていた

結局、家に帰ることした。

僕が立ち上がるが

少女は一切動かない。

腰がぬけて

動けないみたいだ。「ちょっといいですか？」

細い手首をつかんで

脇に身体を入れて

ぐいっと立ち上がらせる。

半ば、背負うように

歩き始めた。

少女は驚くほど軽く、

冷たかった。

濡れた黒髪が

僕の顔にも

少女の顔にも

はりついて少しばかり

邪魔だった。

真っ暗な公園は

来たときとは違い

何故か暖かった。

しかし、奇妙な二人が

歩いていることには

変わりはない。

泥にまみれて

びしょびしょ。

片方はもう片方を

支えながら歩いている。

端から見たら笑いものだ

公園からでて、

一般道の歩道を

歩いていく。

オレンジ色の電灯が

コンクリートについた

僕らの歩いてきた水の

しるしを明るく

照らしていた。

誰も、自動車すら

通らずに僕らは

アパートについた。

自分の部屋のドアの前に

つくと少女を自立させ、

鍵をあけて中に入った。

玄関の電気をつけて

奥に行こうとした。

少女に来るように

手招きしたが

動く気配がない。

しかも変な顔をして

いた。

（そうか）

部屋をでて

少女の手をひいて

大家さんの部屋の

ドアを二回ノックする。
「すいませ〜ん!」

中から「はい」という
元気な返事が聞こえると
走って急いでくる
床をならす足の音が
近づいてくる。
サンダルを引きずる音の
すぐあとにドアが
開いた。

「こんばんは」
「あら、こんばんは」
大家さんは僕の姿を
一目みるとあとの
言葉を失い、目を丸くして
違う言葉を喉から
引っ張り出した。

「どうしたのっ!」
「こんなに汚れて!!
しかもびしょびしょ!」
「一体何があつたの!」

僕はちらりと
少女を見てから
「すいません。
説明はあとで
ちゃんとしますんで

彼女に風呂と着替えを
お願いできますか？」

大家さんは僕の後ろの
少女をちらりと見た。
一瞬、ためらった顔を
したが

「いいけど…」

女の子の服はないよ。
あなたのジャージを
貸してあげて」

「わかりました」

僕が自分の部屋に
取りに行こうとすると
大家さんは少女の
手を引き、

「おいで、お風呂
貸してあげるから
入りなさい」

少女は僕の方を
ちらりと見てから
大家さんに軽く
会釈して中に入った。

僕は再び自分の部屋に
入って、なるべく
綺麗なジャージを
引っ張り出して
大家さんの部屋に
戻った。

「お兄ちゃん、
ばあちゃんが
玄関に置いてだつて!!」

「まだいたの？」

「うん！今日は
お泊まりなんだ」

頭を撫でる。「あ、あと置いたら、
お兄ちゃんも

自分の部屋に行つて
お風呂入りなさい
だつて。話しは
それから良いつて」

「分かつた。
ありがとう」

自分の部屋に戻り
汚れた服を洗濯機に
投げ入れて
風呂に入った。
池の水のぬめりは
しつこく、なかなか
落ちなかった。
溺れさせることが
できなくて悔しそうに
しているみたいだつた。

風呂からでて
大家さんの部屋に

入るとテーブルに
大家さんと

僕のジャージを着た
少女が座っていた。

僕も座ると大家さんが

「一体何があつたの」

約束通りに僕は

何があつたのかを

話した。

本を忘れて、

取りにいったことから
池に落ちて、救助した
ところまで。

泣いていたことは
ふせておいて…

「分かった。

話してくれて

ありがとう」

大家さんは少女を見て

「ダメだよ。

最近は物騒なことが

多いから、女の子が

夜一人で歩いちゃ。

分かった？」

優しくだが

きっぱりとした

口調で注意した。

少女は済まなさそうに

うつむいて頭を
少しばかり下げた。

「あなたも」

僕を見て言った。

「今夜は人を助けたかもしれないけど夜は
出歩いちゃダメ。

今後は気をつけること。

ただでさえ、お父さんに
言われてるんだから」

「すいません」

僕が謝ると

どこからか電子音が
ピーピーと何かを

告げた。

「ちょっと待ってて」

大家さんは立ち上がり
奥へと消えていった。

二人は2〜3分

黙って座っていた。

大家さんが

何か入ったビニール袋を
持って現れた。

「ハイ、これ。

あなたの洋服。

まだ乾いてないけど
洗濯しといたから」

少女は立ち上がって
受け取った。

そして深々と礼をして

出口に向かつていった。

「帰るの？」

「一人で大丈夫？」

玄関で大家さんが

聞くと少女は頷いた。

そして

「有難う御座いました」

小さな声だが

ちゃんと聞こえた。

ちよつと高く、

可愛らしい声だ。

「そうかい、気をつけて
帰るんだよ」

もう一度、お辞儀を
して少女は出ていった。

「じゃあ、僕も。

おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

ドアをあけて

部屋を出ると

少女の後ろ姿が

かすかに見えた。

足どりは

しっかりしている。

ゆつくりと

彼女は闇に消えていった…

三週記念 先客

鉄製のドアが叩かれる

独特の重い音が聞こえる。

そのドアを通してから

なのか、小さくくぐもった

元気いっぱいの声が

ノックのあとに部屋に

響いた。

「お兄ちゃん」

また、三回ノック。

「サッカーしよう」

まだ布団に入っていた

僕はそこで目を覚ました。

夏休みに入ったことを

思い出すまで

10秒はかかった。

「お兄ちゃん、

起きてる？」

見えないけれど

首を傾げた感じがした。

「起きたよ」。

ちよつと待ってて」

聞こえたようだ。

返事がかえってきた。

「分かった」。

「ばあちゃんの部屋に
いるから来てね」

タッタッタという
誰かが立ち去る音がした。
布団をはねのけて
着替えると同時に
トースト2枚目を
食べる荒業を
いとも簡単にやった僕は
大家さんの部屋に
急いだ。所用時間は
10分だ。
ドアをノックすると
勢い良く開いたので
ドアにぶつかるところだった。
「お寝坊さんだね」と
サッカーボールを
脇に抱えた小学生に
言われる。
「大きくなるとわかるよ。
睡眠の大切さがね」と
冗談で言ってみる。
ふふん考えるような
仕草をしたがすぐやめて
「行こう」とさっさと
歩き出した。
小学生と言えども
行動力は大人の
二倍や三倍はある。
目的地に向かい
小走りで移動する。
ちょこまかと頑張っても

足の長さは僕の方が
当然長いのでゆったりと
した歩調でも間に合う。
そうして、公園の
自由広場まで来た。
9時30分。
まだ時間が早いためか、
人数は少ない。

昨日の夜とは
全く違う顔をしている。
何事もなかったような
知らん顔だ。
ちよつと呆れる。
夜はもう二度と
来るかと決めた。
幽霊には会いは
しなかったものの
歩くだけでも怖かった。
「あんまり強く
蹴らないこと。
あっちの大きい池に
ボールが落ちちゃうよ」
この公園には2つの
池があり、僕がいつも
読書する小さな池は
奥にある。もう1つは
この自由広場に面してい
てかなり大きい。
ボートの貸し出しとかも

やっついて、結構な
賑わいをみせている。
僕も何回かかりてみた。

「分かったよ」

ボールを蹴り始めた。
なかなか上手い。

ボールを一回も
地面につかずに

頭やもも、足の甲、

身体全身を使い、

リフティングを

続けている。

時々、ポーンと

柔らかくボールを

上げてひょいと

首の後ろに乗せてみたり
している。

「パス」

コロコロとパスが

来たので蹴って

かえしてみる。が、全然違う方向に
転がってしまった。

「お兄ちゃんへタ」

言いながらパタパタと

ボールを取りに行く

後ろ姿に

「ゴメンゴメン」と謝る。

ポツリポツリと

人が増え始めた。

太陽はちょうど

真上でニコニコしている。

夏なのに丁度よい

気温が続いていて

芝生に仰向けで

寝転がり大の字になって

昼寝をしたいような

陽気だった。

「お腹減ったから帰ろう」

汗をびっしょりと

かいていた。Ｔシャツが

はりついて、髪が

かすかに濡れている。

「そうしようか」

僕達はアパートに

引き上げていった。

帰り道に二人の

お腹がハーモニーを

奏でたので笑った。

アパート前につくと

大家さんが待っていた。

「おかえり」

「「ただいま」」

「ばあちゃん、お腹

減った」

「用意できてるよ。

手洗い、うがいしてから

お昼にしようね」

「うん」

一人で駆け足で

行ってしまった。

ボタンとドアが

閉まる音が聞こえると

「いつもありがとね。

あなたの分も用意が

できているから」

「いつもすいません」

僕は会釈した。

「いいのよ。

あの子のお守りも

大変でしょ」

「いえ、楽しいですよ」

「あらそう。じゃあ

毎日お願いしようかな」

「分かりました」

そう言うと大家さんは

声をたてて笑った。

「冗談よ。じょーだん」

大家さんに続いて

部屋にお邪魔する。

「お邪魔します」

靴は二足しかない。

玄関をあがり、

居間にいくと

テーブルに料理が

用意されていた。

「手洗わないとだよ」

すでに準備万端な

彼は僕に注意を促す。

「ハイハイ」

「早くしてねお兄ちゃん。

僕お腹ペコペコで

死にそうだよ」

箸を両手にたてて持ち、
箸の反対側でテーブルを
両手同時にカンカンと
叩いている。

「お行儀悪いから
やめなさい」

大家さんが注意した。
手を洗いに洗面台に
行く途中に和室がある。
仏壇があり、かすかに
線香の残り香があつた。
居間に戻り、テーブルに
三人が揃うと

「……いただきます」
大家さんは時々こうして
食卓に招いてくれる。

大家さんが作った料理は
全部おいしく、僕の
今の目標である。

おふくろの味とは
このことだ、という味。

「今日も公園で？」
「そうです」

黙々と食べる自分の
孫にではなく僕に
質問してきた。

なんせすごい勢いで
ご飯やおかずをほおばり

口がふさがつていて

話せない状態だったからだ

「大きな芝生の広場？」

今日は人はいた？」

「ふつうぐらいですね。

お昼近くになると

人が増え始めましたね」

「そう…」

何故か大家さんは

黙ってしまった。

少しして、重そうな口を

開いて僕に言った。

「あそこの池は

自殺者が多いって

良く聞くわね。

池の深さも何mあるか…

昔、あそこはお城が

建つててね、お堀とか

いっぱいあつて

ここらへんはすごい水が

豊かだったらしいの。

あの2つの池は元々は

つながつていて

その中心にお城が

建つてて水攻めに

あつたのよ」

「そうなんですか。

初めて知った」

「で…その…

昨日の…子」

そこまでいうと

察しがついた。

「自殺しに？」

でもそんな感じでは……」

「そう……」

そこでその話しは

終わってしまったが

僕と大家さんには

何かもやもやしたものが
残った。

「ご馳走さま」

さっさと自分の分を

たいらげてしまった

孫に大家さんは

「布団しいてあるから

お昼寝でもしなさい。

疲れてるでしょ」

「ありがとう。」

「ばあちゃん」と軽くいうと
行ってしまった。

「ご馳走さまでした。」

おいしかったです」

自分と他のあいた食器を

洗いものをしていた

大家さんがいる台所まで

運ぶ。

「ありがとう」

「部屋に戻ります。」

「ありがとうございました」

「また今度も

よろしくね」

僕は部屋に戻り、
目覚まし時計を
午後5時に設定して
昼寝を始めた。

ジリジリと騒がしい音に
起こされる。

ぴったりに5時に起きた。

洗面台にいき、顔を

洗って本格的に目を

覚ました。寝癖がひどい。

櫛を使ってなおす。

鍵をかけ、部屋を出る。

外ではサッカーを

していた。

「どこいくの？」

僕に気づくと

聞いてきた。

近くで見ている

大家さんがかわりに

答えた。

「お兄ちゃんは

これからお仕事に

行くからサッカーは

できないよ」

「そうなの？」

僕を見上げて言う。

「ゴメンね。また明日
しような」

「お仕事頑張つて」

「ありがとう」

頭をなでて

歩いていく。

「遅くならないように
帰ってくるんだよ」

「わかりました」

僕の高校は基本的に

アルバイトは禁止。

だが秘密裏にしている。

学校はここから少しだけ

遠いのでこのあたりに

同級生は住んでいない。

ので多分バレない。

公園を少し先にいくと

小さな居酒屋さんがある。

そこで学校がある

ふつうの平日の

月火水木金に。

7時～10時まで

働いている。

一人暮らしはなかなか

きついのでアルバイトを

しなければ出来ない。

「お疲れ様です」

のれんをくぐり入る。

「いらつしゃ…」

おお、来たな。

今日も頼むよ」

カウンターから
見える厨房の中に
大将がいた。
常連のお客から
大将大将と親しみを
こめて呼ばれている。
捻りはちまきに
坊主頭なので
なるほど、ぴったりな
呼び名だなと思う。
呼び名だけでなく、
優しく気さくで
人柄がよいので
まさに大将だ。
厨房に入り、更に奥に
いくと女将さんがいた。
「今日もよろしく。
もう夏休み？」
「はいそうです」
「じゃあいつもより
体力あるから
頑張ってもらおうかな」
「了解です」
力こぶをつくった。
女将さんはアハハハと
笑った。
「若いね。頼んだよ」
服を着替えて
店に出て行く。
7時になるとお客さんで

いっぱいになる。

大将と女将さんの

人柄のせいかな、

店内はいつも明るい

雰囲気だ笑いが

絶えない。お客さんも

良い人ばかりである。

僕の仕事は注文を

受けて、大将に伝え、

できたものを運ぶ。

最初はなかなか

聞き取れなかったり

落としてしまったり

したが、みんなが

優しく許してくれた。

僕が一人暮らしだと

聞いたときには

小遣いをくれたり

してくれる人もいた。

「おーい」

奥の座敷から

呼ぶ声が聞こえた。

「ただいま」と答えて、

座敷に行く。

50歳ぐらいの

おじさんが一人で

飲んでいた。

「生ビール1追加ね」

もうすでに

そうとう酔っているらしく

顔が真っ赤だ。

「ナカオカさん、

またですか。

飲み過ぎですよ」

僕が言うと

「大丈夫だよ。

まだ酔ってない」

と歯を見せて笑う。

「いつもそういつて…

酔いつぶれて

帰れなくなったら

どうするんですか？」

「いや、すまない。

連れて帰ってくれ」

悪びれた様子もなく

言う。

「いやですよ。

毎回注意しても

毎回酔いつぶれて

何回連れて帰ったか」

このナカオカさんは

同じアパートに住む

おじさんで公園で

ボートの貸し出しを

している。

ほぼ毎日のように

ここに来ては

酔いつぶれて

僕が連れて帰っている。

「いや、悪いね。

「いつかお礼するよ」

これが毎度の口癖。

「そうとう利子がついてますよ。」

何がいいかな。

車とか」

ナカオカさんの

酔いが少し醒めた。

「そんな高いの!？」

ぎよつとした表情をした。

「冗談ですよ」

いたずらっぽく言う

「年寄りをからかうのは

よしてくれよ」

弱々しくナカオカさんが言った。

「じゃあ、お酒は

ほどほどに」

ナカオカさんの

テーブルを離れて

他の注文をとりに行く。

もちろん、ナカオカさんの注文も大将に伝えた。

10時近くになり

女将さんが僕を呼ぶ。

「もういいよ。」

ほら、これ。夕食。

ちゃんと食べるのよ」

タッパに入った

料理をこつやつて
わけてくれる。

「あ、あと、ナカオカさん
頼んだよ」

僕は苦笑いして

「わかりました」と
答えた。

座敷の奥で眠っている

ナカオカさんを揺すり、

「ナカオカさん！

ナカオカさん！！

帰りますよ！！」

凄いいびきが返事として
かえってくる。

寝ている。腕を首に

まわしてひっぱりおこして
店を出る。

「お疲れ様でした」

ナカオカさんは

以前起きる気配はなく

人の苦勞も知らずに

とても気持ちよさそうに

寝ているので

頭を軽く叩きたい

という衝動に毎回

かられるが踏みとどまる。

真っ暗な口を開けた

公園の前を通り過ぎ、

アパートにつく。

ナカオカさんの部屋の
鍵はいつもナカオカさんの
決まったポケットに
入っているので
そこを探ってから
鍵を開ける。

中に入ると
城の写真や城の模型、
本などがおいてある。
ナカオカさんの
手作りの城の
ペーパークラフトが
ブラウン管テレビの
分厚い頭の上で
でんと構えている。
酔っていない、
とても貴重なときに
お邪魔したら、
これについて一時間の
ありがたいお話を
していただいた…
地元にあつた城だと
言っていたのであの池の
城なのだろうと思って
見ていると
またもや巨大な
いびきをかき始めたので
布団をしいて、
横に寝かして

さつさと退散してきた。
自分の部屋に戻り、
風呂と夕食を済ませて
寝た。

その後の火水木金も
ナカオ力さんを
連れて帰った。

日曜日。

いつものように
本を数冊持ち、
出掛けた。

自由広場、博物館、
遊具広場を抜けて、
奥の池にでる。

いつものベンチに
向かった縁沿いに
歩いていくと、
異変に気づいた。

通常なら、ここには
人っ子一人いないのに
僕のベンチには
白い先客がいるのである。

白い先客は
何をするのでもなく
ぼーっとしていた。
僕はゆっくりと
近づいてそのひとを
確認した。

彼女だった。

一週間前の夜と同じ、
白いワンピース姿で
ベンチに座っていた。

僕は立ち止まり、

じっと観察していると

ふいに彼女は顔を

こちらに向けて

お互いが見つめ合った。

数秒間。

彼女はゆっくりと

立ち上がり会釈した。

僕も会釈し返した。

何故だか、夜の恐怖が

まだ残っているように

感じた。ぎこちない

会釈になった。

近寄り、声の射程圏内に

入ると向こうから

先制の一発が

「先日は…

すいません」

「大丈夫ですよ、

そんな気にしないで

下さい。とりあえず

座りましょう」

僕がそういうと

彼女は小さく頷いた。

「あの、おかりした服、

洗濯したんで…

有難う御座いました」
中に僕のジャージが
入った紙袋を彼女は
渡してきた。それを
受け取り、

「いえいえ、どうも」
少し間があいた。

僕は彼女には

わからないように
少し吹いてしまった。

味気のない敬語のみの
会話。まったく自分も
まだまだ大人のふりが
うまい。子供なのに。

「あの…お名前は？」

彼女がゆつくりと

こちらを見る。

「…」

何も答えないので慌てて

「嫌だったら

言わなくていいです」

何か聴いてはいけない、
ことを聴いてしまった。

瞳の奥にかげりが、
黒い何かがあつたように
見えたのだ。

雰囲気を変えようと
話題を探すが、名前を
聞いたので相手は

答えなかったが

自分のを言わないと
思ったので

「僕の名前は…」

「いえ！…いいんです。
もう帰りますから」

僕の自己紹介は

防がれてしまった。

彼女は立ち上がり、

ベンチから離れようと

したが、僕は彼女の腕を

掴んで引き止めた。

「どうして…」

失礼だと思えますが

どうしてあの夜は

ここに？」

彼女の顔は一気に

白くなったと思うと

唇が震え始めた。

「あの…この池は

自殺する人が…その…

多くてですね…」

僕はそのあとの

言葉を濁したが

彼女には伝わったらしい。

「そうですか…」

でも…私はいません」

最後は自らに

言い聞かせているかの
ようだった。

「そうですか。

すいません、気を

悪くしませんでしたか？」

彼女はそそくさと

逃げ出すように

歩き出したが

数mのところで

ぴたりと立ち止まった。

背をむけた状態で

顔少しかけこちらに

むき、聞いてきた。

「本当にここで

自殺した人が

いるんですか？」

踵を返し、戻ってきた。

先ほどとは違って

怯えるように言った。

「本当に…

いるんですか？」

「噂ですけど…」

彼女は震え出した。

「大丈夫ですか？」

こくりと頷くが

そうは見えなかった。

「休んでいったほうが

良いんじゃないですか？

座って下さい」

そう言うとき再び

腰をかけた。

すると彼女がポツリと
「本……」

僕の手の先を見ていた。
それから僕を見て

「どうして本を
読むんです？」

難しい質問だった。

ただ楽しいから、

では正答として

認めない感じの

質問の仕方だった。

少し考えて答えた。

「自分が読む必要が

あると思ったから

じゃないですか」

「じゃあ、私とあなたは

どうして会ったんですか？」

またもや難問を

答えると言われた。

頭の中を引つ掻き回した

結果、ある小説の

セリフが出てきた。

「その必要が

あったからですかね。

あなたは僕を

僕はあなたを

無意識に必要としたから

じゃないですか。

偶然に会って

話をししろと

神様に言われたんですよ」

まあ、小説のセリフ
ですけどね、と

付け加える。

「…ごめんなさい」

小さい声で謝った彼女は
焦点が合わない瞳で
空を見ていた。

「あの…この1週間、
あなたの家を探したけど
暗かったし

道も覚えてなくて。

ここにいたら

もしかしたらと

思ってた水曜日あたりから
ずっといました」

口早にそう言い切ると
一息ついた。思い出したか
のように慌てて

訂正した。

「ずっとと言っても
午後7時ぐらいまで
ですけど…」

僕は驚いた。

「ごめん。」

そこまで待っていたんですか！日曜日の
お昼から5時ぐらいまでしか
いないんですよ」

「そうですか…」

そこで5時のチャイムが
公園内に響いた。

「じゃあ、僕は
帰ります。ジャージ、
わざわざありがとう」

立ち上がり歩いて
数歩いくと、後ろから

「あの、」

僕は振り返って
彼女を見た。

「どうして私を
助けたんですか…」

この答えは何故か
さらっと出てきた。

「助けないといけないからですかね」

「…そうですか。」

また…日曜日は
ここにいますか？」

真剣な目で僕を
見つめていた。

「多分、います」

「じゃあ、

次の日曜日

ここにいます」

四週記念 小説と僕

時は途切れることなく
川のように流れていき、
夏休みの一週間は
すぐに過ぎていった。
気付くと7月はおわり、
だるさを誘う暑い8月が
きていた。
始まったばかりの8月の
暑さがただでさえ
病弱な僕の身体を
更に弱めていった。
食欲があまり湧かない日が
続いていた。

毎日、飲みにくる
ナカオカさんだったが
少しだけ様子が
おかしかった。
飲めるだけ一気に
飲み干して酔っ払う
ナカオカさんだったが
この一週間はちびちびと
なめるように焼酎を
飲んでいた。
豪快さは一切なく、
何か考えごとを

しているようで

中ジョッキが空に

なっけていても、そのまま

じゅっと宙を見ていた。

見かねた僕が

「ナカオカさん、

おかわりは？」と

聞いても「ああ」とか

「うん…」と曖昧な

返事しか返って

来なかった。

女将さんや大将にも

何かあったのか、と

聞いても分からないと

困った顔をしていた。

大将は金曜日の夜に

ナカオカさんの指定席に

座ってナカオカさんに

話し掛けた。

「ナカオカさん、

どうしたんだい？

元気がなさそうな

飲み方してるけど

悩み事かい？」

大将が来たことに

初めて気付いたのか、

少し驚いた顔をして

「ああ、大将か…

いや、何でもないよ」

と笑って言った。

大将も安心した顔をして
「そうかい、

ならよかった」と
仕事に戻っていった。

ちびちび飲んでいても

飲めるだけ飲んで

酔っ払うから

僕はいつもの仕事を

やはりしなければ

ならなかった。

ナカオカさんは

どんな飲み方でも

潰れるのが分かった。

そうして、日曜日がきた。

僕はいつものように

料理や洗濯などの

家事をこなした。

昼前になると

玄関のチャイムが鳴った。

「お昼ご飯は食べた？」

大家さんがドアから

少し顔をのぞかせて

言った。

「まだ、準備もしてません」

「なら丁度良かった。

あなたの分も作ったから

おいで」

「有難う御座います。」

すぐいきます」

「急がなくてもいいよ。
じゃあね」

着替えもしていたので
ドアを開けて

大家さんの背中に
ついていった。

「お兄ちゃんがきたよ。
ご飯食べるから
来なさい」

外でサッカーを
やっていた自分の孫を
呼んだ。ボールを
蹴るのをやめて

片足で立ち、
片足でボールを
止めて大家さんと僕を
確認すると明るい声で

「分かった」と
手を振っていった。

大家さんの部屋に
入ると唐揚げの
匂いがした。

「今日は唐揚げですか？」
僕が尋ねると大家さんは
笑って言った。

「そうよ。
よく分かったわね。
今日は唐揚げ」

「何かそんな匂いが

しましたから。

僕唐揚げ大好きです。
よく親父が作って
くれました」

大家さんは少しだけ
悲しげな顔をしたが
すぐにいつもの

ニコニコ顔に戻り、

「ようが好きだからね。

今日は少しだけ

頑張って作ったのよ」

後ろからバタンと

扉がしまる音が

聞こえた。

「ばあちゃん！！

今日、唐揚げ！！？」

「そうよ」

「やった」

廊下を駆け出した

孫の服の後ろ襟をつかみ

「その前に！！

手洗いうがい！！」

「ホイホイ。

お兄ちゃんもだよ」

僕の顔を見上げて言った

「ホイホイ」

僕がそう応じると

大家さんの手から

抜け出して洗面所に

いった。僕はあとを

ついていった。

手洗いうがいを終えて
居間に行く

テーブルにはすでに

白い皿に盛られた

唐揚げの山が存在して

いた。そのしたには

レタスが重そうにして

山を支えている。

「いただきます」

大好物の唐揚げを

前にしてだろうか、

僕のいつもの声より

1・5倍高くて大きな声が
挨拶をした。

三人で食べ始めた。

やっぱり大家さんの

手料理はおいしかった。

にんにくがちょっぴり

効いていて全く飽きない

十数分で山は

登頂してしまった。

ふもとの草原も

シャキシャキと

爽やかな音をたてて

誰かの胃袋に放り込まれた

食後のまったりとした

眠気が三人を襲った。

穏やかな沈黙を破った

のはやはり、

「今日はサッカー

一緒にしてくれるよね？

月火水木金土と

遊んでくれなかったから」

キラキラした瞳が

僕をつきさした。

断りにくいなと思い、

困ったような顔を

大家さんが察知して

くれた。

「だめよ。お兄ちゃんは

本を読みに公園に

行くの。おばあちゃんと

宿題すすめようね」

「宿題は

終わっちゃいました」

と大家さんに

アッカンベーをして

言った。それから僕に振り向き、

「一緒に行こうよ、

公園！！僕も本読むから」

「うーん……」

僕が渋っていると

大家さんがまたしても

とめに入った。

「どうせ飽きちゃって

お兄ちゃんが本読むの

邪魔するでしょう。

ようくんは集中力が
ないからダメ」

集中力がないのが
自分で気付いているのか
珍しく反論をしないで
妙に簡単に折れた。

「分かったよ」。

また今度行こう」

そう言つと立ち上がり
居間から出ようとした。

「どこ行くの？」

僕が聞くと

「お昼寝する」

ドアを閉めて

寝室に行った。

出る時、少しだけ

ニヤリとしていたように
見えた。

「今日も行くの？」

「ええ」

ふーんと大家さん。

食べ終わった食器を

台所まで持っていき、

洗い始めた。

「あの子と会うの？」

「そうですけど…」

どうして分かつたんです？」

「なんとなくかな…」

女のカンよ。まあ強いて言うなら、あなたがこの間あの子に貸した

ジャージが一昨日あたりかな、干してあったからね。あの子とまた会って返してもらった証拠」

「よく見てますね」

僕が関心して言うと、

「暇なだけよ。」

暇だから細かいことに気がつくの。

忙しいと周りなんか

見えないわよ」

ふう〜と溜め息を出す。

遠い目をしていた。

「でも、今日会うなんてどうして分かったんです？」

驚いた顔をして

大家さんが聞いてきた

「今日会うんだ？」

「知っていたから

聞いたんじゃないんですか？」

「いや、今日とは

知らなかったね。

いつかもう1回ぐらい会うなんて思っていた

だけだよ」

「そうですか」

「女のカンは怖いね」

「そうですね」

二人で笑った。

「じゃあ、そろそろ行ったほうが

「良いんじゃない？」

ちらりと時計を見て

大家さんが言った。

「女の子を待たすのは
感心しないな」

「分かりました。」

行きます。お昼ご飯、

おいしかったです。

有難う御座いました」

「また唐揚げが

食べなくなったら

言いなさい。作るから」

「そしたら毎日ですよ」

「それは勘弁だ」

「冗談です」

大家さんはニヤリと笑った。

自分の部屋に戻り、

近くに置いてあった本、

一冊を手に持ち、

部屋を出て、鍵をしめた。

アパートを出て、

一般道を歩くと

昨日の夕立の証が

コンクリートを

ジメジメとさせていて

昼の草原の爽やかさの

かけらさえなかった。

ただうなるような暑さに

サウナのムシムシ感を
加えて、だるさに
拍車をかけていた。
道行く人の誰もが
太陽に打ちのめされた
顔をしていた。
セミの鳴き声も
そこらいつたいに
こだましていた。

公園に着いたら、
少しだけ気温が
下がったように感じた。
自由広場には
シートを広げて
弁当を食べている
家族がいたが
いつもの賑わいはなく
大人は疲労感が
顔にでていた。
子供達はそれをよそに
汗だくになって
遊びに熱中していた。
逆にクーラーが効いている
博物館の駐車場は
空きがない。夏休みの自由研究と
遊びを兼ねて来る家族が
来ているのだらうなと
思いながら
そこと遊具広場、

林を抜けて
待ち合わせのベンチへと
歩を進めた。
時間については
約束していなかったが
そこにはもう彼女が居た
「こんにちは」
「こんにちは。」
待ちましたか？」
彼女は首を軽く横に振って
「いいえ。今さっき
着いたところです」
僕は彼女の横に
腰をおろした。
木製のベンチは
返事をするかのように
ギイと軋んだ。
彼女の視線が僕の
左手にいった。
「これが何か？」
「あ、いいえ…特には」
そして伏し目になり、
「今日も読書ですか？」
「ええ、まあ…」
左手に持っていた
一冊を彼女に見えるよう
ひらひらさせた。
「やっぱりお邪魔ですか？」
「そんなことないです。
大丈夫です」

「お話させてもらっても
よろしいですか？」

「あ、はい」

彼女は僕に微笑んで

「有難う御座います」

周りの気温が一瞬だけ

暑いから暖かいに

変わったような

気がした。

大きな木の影に

ベンチはあり、

陽向より涼しいが

暑いことには

変わらないので

これはおかしいこと

だった。

不思議な感覚でいると

「好きな食べ物は何？」

「へっ？」

あまりうまく聞き取れなく

聞き返してしまった。

彼女はもう一度丁寧に

言ってくれた。

「好きな食べ物は

なんですか？」

「あゝ、好きな食べ物！

唐揚げです」

「唐揚げですか！

私も唐揚げ大好きです。

三食唐揚げでも平気です」

誇らしげな顔で言うので
僕は笑ってしまった。

「それはちよつと
言い過ぎじゃないの？」

「そうかな…
そうですか？」

彼女はわざわざ
言い直した。

「失礼ですけど、
おいくつですか？」

「同じ年に見えるけど…」

彼女はちよつと

顔と視線を斜め上にして
ほつそりとした顎の

先端に人差し指を
あてて考えるような
表情をしてから、

「１７歳です」

「僕も１７歳。だから
敬語なんていらないよ」

「同じ年なの！？
嘘、２０歳かと思った」

口と目を丸くして
彼女は驚いている。

「それは僕が老けてる
ってこと？」

「違う違う違う」

彼女は手を振って
全力で否定した。

「何か雰囲気か」

大人っぽいつてこと！」

「それならいいけど」

「信じてないでしょ」

彼女が笑ったので

僕も笑った。

「じゃあ、嫌いな

食べ物は何ですか？」

あとに「先生」とつけたす勢いで彼女は聞いた。

「うん」

きゅうりと苦いものが

「きゅうりかあ」

珍しいね。何がだめなの？」

「匂い!!」

僕は即答した。

「匂いなんて

あるっけ？」

首を傾げて言う。

「瓜科にはあるんだよ。

独特な青臭さが」

「そうなんだ」

僕は逆に質問した。

「好きな食べ物と

嫌いな食べ物は？」

「好きな食べ物は

生クリーム。

嫌いな食べ物は

トマト。あつ、でも

煮たトマトなら

食べられるよ」

「変わってるね」

「そう？お互いさ…」

「ばあっ！！！！！！！！」

「！！！！」

後ろの茂みから

何かが飛び出した。

僕と彼女はパツと

後ろを振り向きながら

ベンチから飛び退いた。

その反動で二人とも

バランスを崩し、

尻餅をついた。

「いたっ！！！！」

「大丈夫？」

声のする方向を見ると

そこには困ったような

顔をしたようがいた。

「なんだ。ようか！

びつくりしたあゝ」

ついた尻をはたきながら

立ち上がって言った。

彼女がまだ座っていた

ので手をさしのべて

立ち上がるのを

手伝った。

「ありがとう」

彼女の手は小さく

滑らかだった。

立ち上がる時には

体重を感じることはなく

雲をつかんでいる

みたいでフワフワと
していた。あの夜の
あるか、ないか分からない感覚。

「大丈夫？

お姉ちゃん」

「大丈夫だよ」

さつき僕に見せた

同じ微笑み。

「この子は

僕のアパートの

大家さんのお孫さん」

「ようつて言います。

よろしくね、お姉ちゃん」

につこりと無邪気な

笑顔で言った。

「よろしくね」

ちよつときついが

三人でベンチに

座った。

「な〜んだ。

本読んでない

じゃないか」

僕と彼女の間に座った

ようは不満気な声で

言った。僕と彼女を

交互に見て、

「お兄ちゃんも

隅に置けないねえ」

ニヤリと笑った。

大家さんの遺伝子は
孫にしっかりと
受け継がれているようだ
近頃の小学生は
ませているなと
ちよつと憎たらしく
思った。彼女を見て、
「お姉ちゃん、
お兄ちゃんの彼女？
お兄ちゃんは
優しいから大切にしてくね。
お兄ちゃん、
いつも暇そうだから…」
僕は苦笑いした。
「いつでも
デートに誘ってあげて。
あつ、でも日曜日の
午前中はダメだよ。
僕とサッカーやるから」
これだけの量を
いっぺんに言つたので
疲れたのか、ふうーと
一息ついた。
彼女はよの頭を
なで、笑いながら
「分かった、
日曜日の午後だけ
お兄ちゃんを
借りるね」
ようはニツコリと

笑って

「ありがとう！

お姉ちゃん」と言った。

今度は僕の顔を

見たと思うと

彼女のように

視線を左手に

持っていった。

「あ、本だあゝ。

読書もするんだね」

「デートだけじゃないよ」

僕が言うとううは

じじと僕を見て

質問した。

「何で本を読むの？」

あのときの彼女と

同じように楽しいから

では解答みなさない

というような口調で。

彼女もじじと

僕をみている。

「そうだなあゝ…

まだ意味が分からないと

思うけど、本を読む

って他の人になれて

それが楽しいからかな」

ようは僕から

視線をそらして

池をみた。

「ふん…」

三人とも池でゆれる

紅い夕日を見つめていた

波と波がぶつかり

碎ける瞬間には

夕日も碎けて、

三人の瞳の中に

夕日のかけらが

飛び込んできた。

眩しくて、目を

つぶつてしまいそうに

なるが、決して

目を離してはいけな

いと思つてつづらなかつた。

遠いばやけたところから

ようが僕を呼んだ。

「お兄ちゃん、

読むだけなの？自分で

描いたりしないの？」

ぼうつとしながら

「描くなんて

考えたことないよ」

「そうなの。

ならさあ、描いてみて」

「えっ？」

本当に考えたことが

なかったのでしょうか

提案は僕の中ですぐには

理解ができなかった。

「僕、本読むの好きだよ。

お兄ちゃんが描いた本、
読みたいなあゝ」

「私も…」

ずっと聞いていた

彼女もぽつりと

つぶやいた。

「私も読んでみたいな…」

他の人になってみたい」

真っ直ぐと突き刺す

ように二人が僕を

見ている。

断ることが出来ない

圧力を感じる。

「どうして、僕の

描いたやつなの？」

すると二人が

「「なんとなく」」

その言葉には

もつと深い、特に

彼女の方には

強く深い意味が

込められているような

気がした。

「二人がそこまで

言うなら描くけど、

多分、つまらないよ」

「「やった」」

はしゃいだように

二人は立って

ハイタッチした。

そこで5時のチャイムが
公園に響いた。
また来週、彼女と
会う約束と小説を
描いてくる約束をして
ようと二人で
大家さんのお帰りを
聞いた。

五週記念 黒猫と彼女

次の日、月曜日。

ようやく彼女と約束通りに
自分自身で小説を

描いてみようとした。

一口に小説といつても

そんなに長い小説は

時間的には描けないと

思ったので短編小説で

いいかなと思い、

早速、近くの文具店で

原稿用紙を買ってきて、

部屋の机に座って、

シャープペンを手に

取ってみる。

しかし、一向に

シャープペンは

動き出さない。

一文字だけ、描いてみる。

すぐに消しゴムで

文字はゴムのカスと

なってしまう。

（読むのは簡単だけど、

描くのは数倍いや、

数百倍難しいんだな）と

安請けしてしまったこと

を少しだけ後悔した。

机にかじりつくとは
このことをいうのかと
いうぐらいに必死に
考えてみたがそれでも
思い浮かばない。

3時間、机が粉々にな
りそうだし、

何の進展もないので
あきらめて、夏の課題を
やり始めた。

僕の高校は課題が
大量というか、

殺人的な量を出されて
去年の休みあけには
それこそノイローゼ
一歩手前に陥る奴らも
いた。

それでも、どこの
学校にも秀才はいる
もので、大半が秀才の
周りに押しかけて
ノートを写していた。
僕も勉強は出来ない方
なので友達の秀才に
最後には頼むものの、
それまでは自分で
やろうと決めていた。

時々、数学のサイン、
コサインが将来に

活用できるのか、とか
古文の文法覚えた
ところで、会社で
古文の現代訳を
やらされるのかと
ありがちだけど
そう思う。
先生達は勉強よりも
大切なものがあると
言っておきながら
授業以外の交流は
必要最低限に留める。
小学校ではあったはずの
「道徳」の授業が
中学の時間割りの中に
なかったときは
少しだけ寂しかった。
「道徳」の授業は
とても好きだった。
自分がもしこんな立場で
こういう状況なら
どうするか？
クラスみんなとは
少しだけ違うけど
より良い選択を
考えるのが好きだった。
将来に必要な
心の教育をしないのに
勉強よりウェイトを
重くしているのは

はたから見れば
可笑しなことで
滑稽なのではないか。
それに疑問を持てない
一般社会は（僕も含まれるが）皆が何かに洗脳されてしまったのか？

それでもそれを
否定できない僕は
夏休み中盤の
今日に課題の半分を
終わらせて、バイトに
出かけた。
ひよつとしたら
何か思いつくかもと
思った僕はメモ帳と
シャープペンを
店の服の胸ポケットに
入れて働いた。
ナカオカさんは
先週とは違い、
いつものナカオカさんに
戻った。
注文された焼酎を
持っていくたびに
一人で浮かれた宴会を
しているかのように
よく飲み、一気飲みを
していた。
「ナカオカさん、

そんな飲むと

倒れて救急車ですよ」

という和高らかに笑い

「救急車あ！上等だな！

死ぬまで飲んでやる！！」

ナカオカさんは

焼酎を一気飲み干して

「おかわり！！」と

僕にグラスを渡した。

「先週は何か

あつたんですか？」

グラスを受け取り、

座敷から降りながら

聞いてみると

「何かあつたかつて？

あきらめただけだよ！

単純にな。そうとすれば

話しは簡単だったんだ。

それだけ」

酔っついて

支離滅裂だったし

意味が分からないが

ナカオカさんは

何かを先週あきらめるか

あきらめないかで

悩んでいたようだ。

元気そうになった

ナカオカさんを見て、

大將は嬉しそうだった。

「やっぱり元気な

ナカオカさんの方がいいなあ。今日は一杯サービスするよ」

「よっしゃあ!!」

ナカオカさんの雰囲気に関連られて店内は大宴会になった。

女将さんが僕の肩を叩き、「ありがとう。

今日はもういいよ」と言っただので

店の奥に行って

帰る準備をしていると

女将さんが後から

入ってきて

いつものように

タッパーに入った

おかずを渡してくれた。

「有難う御座います」

と僕が御礼を言うと

「ナカオカさん、

頼んだよ…」

帰りの任務を言い渡したが、何か普段とは

少し様子がおかしかった

「どうかしたんですか？」

と聞いてみると

声をひそめて

「今日のナカオカさん、何か変じゃなかった？」

「いや：変と思ったのは先週ですけど？」

「先週は…」

女将さんは言葉を濁らせた。

「先週は調子が

悪かったんじゃない？

でも、今日の飲み方は異常だったわね。

ナカオカさんに

何かあつたら

うちの人、心配するから変なことがあつたら

私に教えてね」

そう言い残して

女将さんは仕事に

戻っていった。

僕は泥酔した

ナカオカさんを

連れて店を出た。

普段より飲んだためか

猛烈な酒の臭いが

僕の鼻を襲つて

僕も酔っ払つて

しまいそうだった。

千鳥足がわずかに

入った歩き方で

ナカオカさんの部屋に

到着した。

ハタチになったら

酒弱そうだなと

思いながら布団を敷き

ナカオカさんを

寝かした。

部屋にはやはり前と同じ

城のポスターや

模型があつた。

一つだけ、テーブルの

上に見慣れない

十字がはいった

白い封筒と中に

入っていたと思われる

折り畳まれた紙が

広げておいてあつた。

気にはなつたけど

他人のものを見るのは

失礼だと思つて止めた。

部屋の電気を消して

ドアを開けてから

「おやすみなさい」と

返つてこない返事を

暗い部屋の奥から

少しだけ待つて

自分の部屋に戻つた。

次の日。課題を

やっている

ドアを叩く音がした。

ドアを開けてみると

ようが立っていた。

「どうした？」

「本描くの進んでる？」

僕は頭をかきながら
謝った。

「ごめん。なかなか

いいはなしが出来ない」

ようは靴を脱ぎ、

パタパタと走って

居間にいった。

「描いたやつ、どれ？」

ように追いつき、

「残念ながら

まだ一文字も

描けてません」

「フーン、残念だ」

「なかなか難しいんだよ。
本を描くのはね。

何か飲む？」

「ココア！」

「よし、ちよつと

待ってな」

台所で乾いた

マグカップを2つ

取って、粉のココアを

スプーンで入れて

お湯を注ぐと

ココアの甘い匂いが

広がった。カップの

底に粉が残らないように
注意してかき回した。

ココアの液体が

更に濃い色になった

気がした。「はい、どうぞ」

「ありがとう!!」

するとようは

カップを持ったまま

顔をしかめて

「お兄ちゃん、

夏なのにHOTだね。

暑くないの？」

確かにそうだと思った。

しかし、

「ココアはHOTで

飲むものでしょ」

「お兄ちゃんは

HOT派なんだね」

と言うと

二人で汗をかきながら

ココアを飲んだ。

飲むのやめて

カップを両手に持ち、

ようが言った。

「お兄ちゃん、

アイデアが出ないときは

何かひとつに絞って

考えるといいんだって。

何かの本に書いてあった」

小学生らしくない

知識を持つようは

時々、自分より
大人なんじゃないかと
思うときがある。

「良いこと聞いたな。
ひとつのことに絞るか。

なんか描けそうな
気がしてきたよ。

ありがとう」

ようの頭をなでると
嬉しそうに笑った。

がひとつのことに絞ると
聞いても、全く描けない…
土曜日に再挑戦をしたが
かじりつくだけ
かじりついて終わった。

日曜日。

午前中の家事を
しながらもアイデアを
出そうと必死に
考えたが、包丁で
指を切ったり、
洗剤を入れないまま
洗濯機を回したりを
繰り返したので
思考を中断した。
自分の脳みそが
ふにゃふにゃの

乾燥したスポンジの
ように感じた。

昼食を早めにとって
ベンチで座りながら
考えようと思い、
ドアを開けると
ようがサッカーを
していた。

「公園に行くの？」

「うん、一緒に
来ないの？」

「いいよ、邪魔しちゃ
悪いしね。帰ってきたら
本読ませてね」

「あのな、」

描けなかったことを
言おうとしたとき
大家さんが部屋から
出てきて

「ようー!!」

ちよつと来なさい!!」

「じゃあね、

頑張つてね、お兄ちゃん」
走って行ってしまった。

ベンチに着いた。

彼女はまだ来てない。

まだ12時30分だからか、
普段は1時30分だ。
人は変わらない。

静かなところで
一人でうーんと
うなつて考えていると
僕だけがうなつて
いるわけではないと
気がついた。
周りには僕しか
人は見当たらなかったが
何かが鳴く声が
聴こえた。
何だろうと思つて
立つてベンチの周りを
みてみると
ダンボール箱が
ベンチの後ろの
木の影に置いてあつた。
中を覗いてみると
汚いタオルがひいてあり
猫が二匹いた。
一匹は大きく白い猫。
もう一匹は小さく黒い。
母猫らしい白猫は
黒い猫をしきりに
なめているが
黒い猫はぐつたりと
横になつて
目を閉じている。
肋骨は浮き上がつて
形があらわたつた。
呼吸は辛うじて

確認出来たが

明らかに衰弱していた。

「大丈夫か？」

反応したのは母猫で

僕を警戒し始めた。

フーフーとうなる。

黒猫の様子を見ようと

手を伸ばすと

母猫はひっかき

噛みつこうとしてきた。

「何しているの？」

後ろから彼女の声がした

「ちよつときて」と

手招きする。

彼女は猫をみると

すぐに黒猫を

抱こうと手を伸ばした。

母猫は彼女の手に

かみつ き、フーフーと

うなる。

「大丈夫よ。

大丈夫。 何もしないよ」

彼女は母猫に

優しく話しかける。

しばらく母猫は

彼女の白い手に

噛みついていたらが

やめた。そして

その傷をなめた。

「このこは任せて」

黒猫を抱きかかえて

「近くの

動物病院に行かなきゃ？

知ってる？」「ここからすぐの

場所にあるから

ついてきて」

僕達は黒猫を

病院に連れて行った。

病院はすいていたので

すぐに診せることが
できた。

メガネをかけた医者は

黒猫の瞳にライトを

あてたり、体をさわったり

したあとに僕達に

「かなり衰弱しています。

もう数日経っていたら

危なかったでしょう…

目が見えなくなり

かかっていますが

命に別状はないでしょう

3日間こちらで

預かりますので

明後日また来て下さい」

「有難う御座います」

僕がそう言っ

診察室を出ようと

すると

「ああそうだ…

お金はいらないよ」

にっこり笑って

医者はそう言った。

「捨て猫だし、

救った君達からは

お金はとれないよ。

小さな命を救ってくれて

ありがとう」

僕達は小さな病院を

でていった。

「大丈夫で良かったね」

彼女は僕の右にきて

歩調を合わせて

歩いている。

「そうだね。

目は見えないかも

知れないけど

助かって良かった」

僕は母猫を思い出した。

まだダンボールの中で

子供の帰りを

待っているのだろうか、

それとも、子供のことを

忘れてどこかに

行ってしまっただろうか

それでも、母猫が

子供を守るための

必死な表情が

頭に浮かぶ。

「母って凄いな」

僕がぼつりと

独り言のように

つぶやくと彼女が

僕の顔を覗きこんだ。

こんな近くで

彼女の顔を見るのは

初めてだった。

瞳は透き通っていた。

が、その奥には

水の底で沈殿している

泥の濁りのような

影が見えたのだった。

「そう？母親って

そんなに凄い？」

その口調には

冷たい氷のような

感じが含まれていた。

僕は違和感を感じずには

いられなかった。

彼女の表情は

悲しげであった。

彼女は顔をそむけて

またさつきと同じように

歩きだした。

公園に戻ってみると

母猫はどこにも

いなかった。

「やっぱり……」

彼女がそういうのが
確かに聞こえた。
その声は軽蔑を
こめられていた。
二人でまたベンチに
座って僕達は
話し始めた。

5時のチャイムが鳴ると
彼女が思い出したように
言った。

「そうだ！小説は？」

僕は正直に言った。

「ごめん。なかなか

良いはなしが

考えられなくて。

来週必ず描いてくるよ」

彼女は申し訳なさそうに

「催促してるわけじゃ

ないんだよ。ただ

進んでるのかなあと

思ってた聞いただけ」

ベンチから立ち上がり

「じゃあ、来週

楽しみにしてるね。

バイバイ」

笑いながら

手を振って別れた。

六週記念 黒猫小説

次の日、大家さんに
黒猫のことを話した。
居間のテーブルに
僕と大家さんとようが
座った。

見つけた経緯等を
全て話し終えてから
「一応、里親を
探してみようと
思うんですが…」

「それが一番だねえ。
私もポスターを
作ったり、近所に
猫が欲しい人がいるか
聞いてみるよ」

ようは僕を見て、
眉をひそめた。

テーブルから体の
半分を乗り出して
「里親って猫をどっか
違う人にあげるって
ことだよな？」

「そうだよ」
大家さんが答えた。
ようは次に大家さんを見ながら

「ここじゃ飼えないの？」

僕、猫飼いたい！！！」

「ダメ。ようくんが

飼うんじゃないし、

ここじゃ飼えない

決まりになってるの。

どうせ、すぐ

飽きちゃうでしょ」

どこかで聞いたことがある

ような台詞だった。

大家さんは

有無を言わさないとでも

言うような言い方で

僕が子供ならそこで

折れていただろう。

しかし、ようはそれでも

大家さんに食いついた。

「飽きないよ！！」

絶対に飽きない」

「ダメ！！あなたは

世話しないでしょ。

それに飼うのにも

お金がかかるの！！

お金だせる！？」

そう言われると

さすがにようは

シユンとなった。

子供でも分かっている。

自分のお金では

猫は飼えないと。

「でも…でも…」

ようが少しだけ
可哀相に思った。

「あの…」

「何？」

さつきとはぐると

態度を変えて、大家さんは
僕に柔らかくこたえた。

「里親が

見つからなかったときは
僕の部屋で飼っても

よろしいでしょうか？」

この質問は大家さんには
意外だったらしく、

目を丸くして

口が大きく開いた。

「そ、そうね…」

うーん…」

「お兄ちゃんが飼うの？」

僕も面倒みるから

おばあちゃん！！

お願い！！」

世界の共通項、

おばあちゃんは

孫に弱い。

ようの潤んだ瞳を

見た大家さんの決意は

揺らいだ。肩も少しばかり

揺れた。ちよつと

黙ったあとに、

一息吐き出すと、

「仕方ない。

飼ってもよろしい。

だけど里親が

見つかったら

ちゃんとあげること。

いいわね」

「やった〜」

ようははしゃいで

小躍りしだした。

「すいません」

僕が申し訳なさそうに
言うと

「あなたは悪くないわ。

仕方ないことだもの。

そのかわりちゃんと

世話してあげること。

部屋もきれいに

使うようにしつけること。

わかった？」

「もちろんです」

そのあと、

ようと二人で

飼うためのゲージや

餌を買いに近くのホームセンターに

行った。ようが

「猫って砂に

うんちやおしっこ

するんだね」

まじまじと猫砂を
見つめていた。

「僕達とどっちが
スツキリするんだろう？」

真面目な顔をして

つぶやいたのを見て、

僕はホームセンターで
大爆笑してしまった。

片手に買ったゲージ、

片手に一緒に行きたいと

ついてきたような

手を握って動物病院に

黒猫を引き取りに

行った。

昼間の動物病院は

すいていて僕達以外に

人はいなかった。

受付をした後、

二人で待合室の

中途半端な硬さの

ソファーに座って

待っていた。

奥から一鳴き、

大型犬らしい声が

聞こえたと思ったら

すぐに診察室から

看護師の人が出てきて

「次のかた〜どうぞ」

と招き入れられた。

先日と同じ医者が
座っていた。

「こんにちは、弟さん？」

と眼鏡を通して

ようを見つめて言った。

住んでいるアパートの

大家さんのお孫さんです

と説明すると

「そうなんだ。でも

雰囲気が似てるから

兄弟だと思ったよ」

あ、そうそうと医者は

診察室の奥に消えた。

2分ほど経つと

黒猫を抱いて現れた。

「ほーら、大分元気にな

ったよ。見てご覧」

黒猫を診察台に

優しく置いた。

黒猫はキョロキョロと

周りをみて、自分を

囲んでいる人間を

一人一人不思議そうに

じつと見た。

ようが診察台に

しがみつき、黒猫を

キラキラした目で

見ている。

「触っても平気？」

医者を振り返って
聞くと

「大丈夫だよ。
撫でてあげな」

医者は笑顔でこたえた。
ようがおそろおそろ、

猫の小さな頭に

震える小さな手を伸ばす

それに気づいた猫は

自らすり寄って

気持ちよさそうに

のどをならした。

「うわ……」

感動でそれ以上、

何も言えないようは

猫の首をかいてあげた。

「ほら、抱いてあげな」

「どうやって抱くの？」

医者が両手で猫の腹を

優しくつかみ、

抱いてみせた。

そしてように

「はい」と渡す。

ぎこちなくようが

抱きかかえると

「上手上手」と言っ

てようの頭をなでた。

診察室をでるとき、

二人で医者に

お礼を言った。

「また何かあったら来てね」

と優しく言った。

帰り道、ずっと

ようは猫を抱いて

歩いていた。

僕の部屋に帰り、

黒猫を離すと

猫は自分を取り巻く

新しい状況をさっと

歩いた。すぐに満足げに

僕の膝のうえにのり

うとうととした。

かなり人なつこい。

僕も撫でてみる。

見つけたときは

泥まみれで

汚かったが

洗ってもらったのだろう

毛は綺麗でふわふわ

している。毛艶も良い。

腹もガリガリだったのに

少し肉がついたように

見えた。

「お兄ちゃん、

餌あげないと」

ようはそう言っ

ステンレス製の

皿にキャットフードを

カラカラと出した。

僕は同じステンレスの皿に水を入れて床に置いた。

何だ？みたいな感じで

猫は寄っていき、

水であることを

確認するとざらざらした

舌で器用に水を

飲み始めた。

ようがその横に

餌をおいてやると

匂いをすんすんと嗅ぎ

おいしそうに食べた。

バイトの帰りに

女将さんが僕の服を

見て、

「なんかいつぱい毛が

ついてるよ」

というので説明をしたら

大將がそれを

聞きつけ、

「ほら、食わせてやれ」

と残った魚を

ビニール袋に少し入れ

分けてくれた。

「名前はなんて

言うんだい？」

大將が聞いてきた。

「まだ決まってるないです。
もしかしたら、
欲しいっていう人が
いたときに、余計に
悲しくなりそうで…」
「そうかい。でも、
つけてやったほうが
猫も喜ぶぞ」
「名前、か…」

日曜日。

ようにも大將と
同じように

「お兄ちゃん！
名前どうする」

「ようはなんていう
名前がいいと思う？」

「うゝん…太郎！！
あ、でもタマでも
いいかな」

大家さんはパソコンで
里親募集のポスターを
作っている。

「おばあちゃんは
何がいいと思う？」「何でもいいよ。
ただし可愛い名前に
してやりなさいよ」

「そうだね…
お姉ちゃんなら可愛い
名前つけてくれるかな？」

「そうだね。

今日、会ってから

聞いてみるよ。

お姉ちゃんの名前も

聞いてから決めようか」

「うん」

ようは元気に頷いたが
そのあと顔をしかめた。

「そういえば、

お兄ちゃん…

本描いてくれてる？

まだ読んでないよ？」

「あつ…うん。

もう描いてあるよ」

僕は嘘をついた。

完全に記憶から

消えていた。

「公園から帰って

きてから持つてくるよ。

名前考えながら

読もうか」

「それがいいやー！」

「じゃあ、僕は

コイツを連れて

部屋に戻ります。

じゃあ、また来るよ」

大家さんのように

そういつて部屋に

戻った。そして、急いで

原稿用紙と向き合った。

そこにすると

猫が寄ってきて

僕の膝で丸くなった。

脳に電気が走った。

「黒猫：母猫：名前：

これだっ！！！」

僕の脳内には

洪水のように

アイデアが溢れていた。

シャープペンは

原稿用紙でじつに

一時間ちかく、止まる

ことなく踊り続けた。

1時30分。

公園の僕の定位置には

早くも彼女がいた。

僕は黒猫と原稿用紙を

抱えてきた。

「あれ、もう大丈夫なの？」

「うん、大分元気に

なったよ。大家さんが

うちで飼うことを

許してくれたんだ」

「そう。よかった」

僕が腰をおろして、

黒猫をはなしてやった。

だけど、黒猫は

地面にすわり、

周りを見渡ただけで
かがみ、身構えてから
体のバネをつかい、
僕の膝に飛び乗った。
そして、あくびひとつを
のこして、うとうと
し始めた。

「もうすっかり
なついてるね」

彼女はクスクスと
笑った。

「そうなんだよ。
警戒心のかけらも
ないんだよ」

苦笑いしていった。
それから手に持っていた
原稿用紙を彼女に
さしだした。

「これ。下手くそだけど
頑張って描いたから
感想ぐらいは言ってね」

「わぁ、ホントに
描いてくれたんだ！
ありがとう。」

早速読ませてね」
原稿用紙の両端を
両手で持ち、彼女は
読み始めた。

僕は黒猫の首を
かいてやりながら

彼女が読む姿を
みていた。

ゆっくりとその瞳が
1文字1文字を
かみしめながら
読み進めいくのが
わかった。

それと同時に
彼女の顔が険しく
なっていくように
見えた。

僕はその表情を見て、
少しハラハラした。
何か悪いことでも、
面白くない話でも、
描いてしまったのかと。

ぼくは猫だ。

毛は黒い。

目はちよつと悪い。

小さいときにお腹が

空きすぎたからだ。

ぼくにはおとうさんも

おかあさんもいない。

というか知らない…

ただのおかあさんに
抱かれたこと、
その温かさは
なんとなくだけど
覚えているんだ。

ぼくは気づいたときから
ひとりぼっち。
みんな、ぼくが近寄ると
毛が黒いから
気味悪がって
逃げていくように
離れていった。

ぼくは寂しかった。
愛されたかった。
必要とされたかった。
ぼくはおかあさんを
探し始めた。
どこにいるかなんて
わからないけど。
愛してくれる
あの温かさを求めて。

「ぼくのおかあさん
知りませんか？」
「ぼくのおかあさん
知りませんか？」
「ぼくのおかあさん
知りませんか？」

かえってくるのは
無言と嫌悪の視線。

ぼくは悲しくて
悲しくて悲しくて…

ひとりぼっちで
何日も何ヶ月も
何年も歩いて歩いて
歩いて…

もう諦めかけたとき、
ひだまりのベンチに
座る白い大人の猫さんが
いました。

ぼくが近寄り、
「ぼくのおかあさん
知りませんか？」

大人の猫さんが
「わたしのことも
知りませんか？」

何日も何ヶ月も
何年も歩いて歩いて
歩いて探したの。
見つからなくて。
真っ黒い毛をしているの
だけれど…」

ぼくと大人の猫さんは
じっと見合いました。

「あなた…名前は？」

「分かりません。

おとうさんも

おかあさんも

気づいたら

いませんでしたから」

「そう…」

ぼくたちは

黙ってしまいました。

「ぼくもおかあさんを

探して何日も

何ヶ月も何年も

歩いて歩いて歩いて

きました。

ひとりぼっちで、

とてもとても悲しかった

寂しかった」

そういうとぼくの瞳から

ひとつぶの涙が

こぼれてしまいました。

「頑張ったね」

大人の猫さんは

ぼくを抱いてくれました

それはぼくがずっと

ずっとずっと

求めていたものでした。

「おかあさん…」

自然とつぶやいていました。

「いい話ね…」

彼女は吐き捨てるように
言った。

彼女は何故だか
苛立ち、苦々しそうに
している。

僕の膝に指差して

「この子がモデル？」

「そうだよ」

「ふーん」

「でさ、コイツまだ
名前がないから

キミに考えて

欲しいんだけど…

何かいい名前ある？」

彼女はうつむき、

彼女自身のつまさを
じっと見つめたまま、
黙っている。

次に出す言葉を

選んでいるようだった。

僕も一緒に黙って

彼女の言葉を待った。

数分後、

「私、名前つけたくない」

「えっ？」

僕はあつけにとられた。

「正確には

私は名前をつける資格

なんてない。

私が名前をつけると
その子を縛りつけて
しまうから」

よく分からなかった。

彼女はこうして

名前をつけたがらない
理由が分からなかった。

そもそも、彼女に

名前をつける資格が

ないとは思えなかった。

彼女がこの命を

救ったといっても

過言ではないからだ。

彼女は依然として

うつむき、僕や

黒猫を見ようとしない。

「だから、あなたが

名前決めてあげて」

彼女は原稿用紙を

僕と彼女の間の

スペースに置いた。

彼女は原稿用紙の上に

手を置いて動きが

止まった。何か

深くて黒いものの

底に沈んでいく。

原稿用紙を置くときの

音に目覚めたのか、

黒猫は首をもたげて

彼女の沈んだ顔を
じつと見つめた。

「僕は、そういう
センスがないから
決められないよ。

お願いだから
考えてくれ…」

「考えたくないっ!!」

彼女は痛そうに
叫んだ。

黒猫はムクリと
立ち上がり、

原稿用紙の上の
彼女の手に近寄った。

「…」

黒猫は彼女の手を
なめはじめた。

母猫がかみついた
傷のところだった。

彼女は黒猫を見た。
黒猫も彼女を見た。

「ニャ」

涙がこぼれた。

彼女の頬を

顎をつたい、
こぼれた涙は

黒猫の目尻にとまり、
毛をつたい、原稿用紙の
しみとなった。

「クロ…」

彼女は涙を拭い、

「あなたはクロ…

気味悪がられても

おかあさんが

こどもとわかる

その毛がおかあさんとの

繋がりの証拠なのね…クロ」

彼女が微笑み、

クロを抱きしめた。

嬉しそうにクロも

「ニャ〜」とこたえた。

七週記念 彼女

5時の放送が流れて
クロを抱いて帰る。

彼女に、ように名前が
決まったことを言おうと
アパートに誘ったが
彼女は優しく断った。

「私が決めたわけじゃ
ないよ」

僕に抱かれたクロに
顔を近づけて

「あなたの小説が
クロにしようって、
そううつたえてたから」

そうよね、とクロの
頭を撫でる。緑色の
瞳をじて、それに
こたえるようにのどを
クルクルとならす。

「じゃあね、また来週」

「クロ！！クロだよ！！！！
クロだね！！！！ピツタリだよ！！！！」
「
ようが小説を
読み終えた直後に
そう叫んだ。」

「お兄ちゃん！！！」

「凄い！ぴったりだよ」

「クロって言ったのは

お姉ちゃんだよ。

お兄ちゃんじゃない」

と訂正すると

彼女と同じように

「お兄ちゃんだよ！！

お兄ちゃんがこの本を

描かなかったら

違うぴったりじゃない

名前だったんだよ！！

ね、クロ」

膝に乗っているクロに

話しかけた。

クロはくあと

あくびをした。

「いい名前だね。

小説もなかなかの

ものだったよ。

最後は感動して

涙がでたよ」

大家さんが絶賛した。

「僕も僕も！！」

ようがバタバタするので

クロは機嫌をそこねて

僕の膝に移動した。

「ああ！クロっ！

なんで行っちゃうの？」

「よう君が

バタバタするから
怒っちゃったんだね」
笑いながら大家さんが
言った。

「ごめんね、クロ」
ようがクロを見て
謝ったがクロは
そっぽをむいて
尻尾を緩やかに
ふった。

一週間、クロと
生活したが飽きなかった。

課題に飽きては
クロにかまった。
見えなくなりかけた目は
問題ないようだった。
ねこじゃらしを
クロの目の前で
チヨコチヨコと
動かすとしばらくは
じつと目で追っている。
我慢しきれなくなると
ぱっと飛びかかり、
ねこじゃらしに
ねこパンチを炸裂させる。
その姿はさすが、
百獣の王ライオンと
仲間であることを

思わせる俊敏な動きだった。

昼には一人と一匹、
ゆったりとひなたで
ひなたぼっこをした。

午後には公園まで

クロを抱いていき

散歩をして、次の小説の

アイデアを練っていた。

クロの小説を描いて以来

コツをつかんだのか、

様々な小説が

僕の脳内から

産み出されていくのが

わかった。

日常のある一点から

アイデアが生まれ、

小説を自らがつくって

いくその工程は

とても楽しく

面白かった。

次はどの小説を

描こうと悩むのも

楽しかった。

公園を歩きながら、

前をいくクロに

「次はどういうのが

いいかな？」

と声をかける。

クロは一度こつちを

振り返るがすぐに
自分の前を見る。
クロに犬のように
リードをつけなくても
僕から一定の距離
離れるとはたと
立ち止まって僕を
確認するように見る。
僕が近づくとまた
一人で、いや
一匹でにフラフラと
気ままに歩いていく。
公園を散歩する犬と
出くわす。犬は吠えるが
クロは物怖じせずに
ちらりと犬をみて、
何事もなかったように
つんと歩いていく。

こうして公園を
歩いているとき
時々、クロは
僕以外の何かを
確認するように
周りをキョロキョロと
見回したり、木の幹や
土、落ち葉、雑草の
匂いを嗅いでいた。
何を探しているかは
なんとなくわかったが

探しものは一度も
見当たらなかった。

日曜日の昼、

次の小説の最後を

描き終えた僕は

ふーと満足感が

つまった息を吐いた。

すると、大家さんが「お昼食べた？」と
ドア越しに聞いてきた。

「まだです〜！」

「ならいらつしゃい」

「わかりました！

今行きます！！」

大家さんの部屋に行く。

「ありがとうございます」

「いえいえ。

なんか嬉しいことでも

あった？」

「いえ、新しい小説が

描き終わっただけです」

「じゃあ、帰ってきたら

読ませてちょうだい。

私も楽しみにしてるから」

「分かりました」

「僕にも読ませてね」

「ハイハイ」

そう言つて僕は
立ち上がり

自分の部屋に
原稿用紙をとり
行った。机から
原稿用紙をとる。
公園に行こうと
部屋を出て鍵をしめた。
一歩踏み出した瞬間、
部屋の電話が鳴った。
留守電にいらてくれる
だろうと思い、
無視してアパートから
離れた。

今日はひとときわ
暑かった。

35 以上だ。

公園までの道のりで
シャツが水をかぶったようにびしょびしょになった。
いつも午前中の
早い時間に公園に行く
クロは外に出るのを
嫌がり、ついてこなかった。
道行く人も
前屈みになり、
だるそうにしていた。
元気なのは太陽だけで
動物も植物もやけに
しおれていた。
奥の池のベンチには
珍しく誰もいなかった。

いつもならこの時間には
彼女が座っている。
だが、人影はどこにも
見当たらない。
僕はとりあえず
ベンチに座って待つ。
新作に誤字脱字がないか
注意深く読み始めた。
どうしてか、
ソワソワしてしまう。
読むのに集中できず、
半分ぐらいで
やめてしまった。
やめてもやることなく
余計ソワソワした。
遠くにある大きな時計を
目を細めて見てみる。
もう2時30分に
なるところだった。
いつもの彼女なら
1時間遅刻だな、
と考えた。
暑いから今日は
来ないかもと
思い始めたのは
その15分後の
2時45分だった。
もうすぐで3時になる
というところで
人影が一つ現れた。

遠くてまだ彼女か、
どうかははつきりは
しなかったが人間では
あった。

黒っぽい姿だ。

近づくにつれて
彼女ではないと
気がついた。

見ているだけで
こっちが暑くなるほど
スーツに身をつつんだ
男性だった。

きちんと身だしなみを
しているところは

夏とは思えないほどであった。

「ここにいたのか。

大家さんから

聞いたぞ」

「親父…

見てて暑いな」

「そこまで

暑くない」

「いや、親父じゃなくて

俺が暑いの」

「そうか、すまないな。

だけどこれは意外と

涼しい。なにしろ

新素材を」「いや、その話をしに

今日は来たの？」

「無論、違う」

「じゃあ、なんでわざわざ来たの？」

「それは…お楽しみだ」

親父は二力つと笑った。

「行くぞ」

というなり俺の腕を

つかんで引きずった。

「ちょちょちょ!!!」

待て待て待て！

誰も逃げないから

引きずるなあゝ」

「まあ、はしゃぐな！

ハハハハハハ」

「はしゃいでない!!」

つかんでいた手を

強引に振りほどいた。

「むうゝ、久々の

親子の再開で

照れているのか？

そうだ!!俺の胸に

飛び込んでこいっ!!」

「誰が飛び込むか!!」

「よう君は喜んできた！

お前も!さあ、こい!!」

両手を広げて

スタンバイしている

親父にため息をついた。

ようが猪のように

親父に突進、

親父が軽く受け止めて、

よしの両手を持ち、
楽しげにクルクル
回っているのが

簡単に想像できた。

「ハハハハハハ」と

笑いながら…

「仕方ない。今日は
無理か…また今度に
するか」

（だからいつでも
やりません）

と心の中で叫んだ。

親父は博物館の駐車場に
歩を進めた。

白い軽自動車のドアを

開けて親父は乗り込んだ。

僕も助手席に

乗り込んだ。

「車、かえたの？」

「いや、車検に

出している」

「そうか…」

親父がエンジンを
かけた。

「シートベルトしたか？」

僕のシートベルトを

確認して車は発進した。

行き先は…

お楽しみらしいが、
だいたい分かつている

実家とは車でも
かなり遠い。

わざわざ親父が
アパートまで出向くのは
そうとうなことだ。

お楽しみも何もないが
僕は助手席の窓から
外を眺めて虚無感に
浸っていた。

親父が運転しながら
「いつもあそこで
読書しているのか？」

「学校の課題はどうだ？
ちゃんとやってるか？」

「最近、仕事でな……」
と話しかけてくるが

僕は「うん」「まあ」「そう」
と曖昧な返事しか
しなかった。

親父は仕方なさそうに
僕をみて悲しげに
微笑んだ。

「ごめんな」
本当に小さな声で
そう言うように
聞こえた。

僕は僕自身と
向き合うのに
精一杯だった。

二時間の道のりを
終えると僕達は
やけに白い建物の前で
止まった。
赤い十字が妙に
不気味だった。
親父の一步半あとに
ついて歩いた。
ガラスの自動ドアを
通って薄暗い受付に
挨拶しに行つて
二人で名前を書いた。
「三階の322号室です」
若い受付の女性が
場所に似合わない
明るい声でそう言った。
エレベーターに乗る。
照明はぼやかかった
ように薄暗く僕達を
照らした。
二階で50代後半の
女性が慌てたように
乗り込んできた。
「何階ですか？」
親父が聞くと
「あ、三階です」
有難う御座いますと
女性はつぶやいた。
ゆっくりと上に上がると
奇妙な浮遊感が

僕達をなでた。

エレベーターは

三階を少し通り過ぎた後
下に修正して

重々しく扉を開けた。

三人が同時に

エレベーターから
降りた。

「じゃ、これで」

女性は左の廊下へと
進んだ。

親父は正面の壁の
案内図をみて目的の
部屋番号を探した。

「右だな」

僕達は右に進んだ。

廊下は全て白いが

夕日が窓から入りこみ、
紅く染まっている。

音はなく静かだ。

時折、看護士が

靴で固く乾いた音を
たてる以外はしんとして

落ち着いている。

特有の消毒液と

何かが腐ったような
匂いが混じり、

僕の鼻についた。

匂いにより

落ち着いている雰囲気、

静かな沈黙は
重圧を帯びる。

それだけではない。

この建物自体も

そんな圧迫要因を

持っている。

僕はこの重圧が

大嫌いだ。

同じ地球にあるのに

この場所、こういう場所は

重力が二倍になった

みたいに身体が

重苦しい。

そこにいた、存在した

何かが違うものとなり、

「おいてかないで」

「忘れないで」

「身体……」

というかのように

まわりついてくる。

僕は気持ち悪くなった。

しかし、吐き気を

我慢して親父に

ついていった。

行かなければ。

「ここだな」

親父が軽くノックすると

扉を開けた。

大部屋の病室。

ベッドは6つあったが

1つ以外は全部

空だった。

窓際の一番奥の

ベッドだけは

カーテンで

見えないように

なっていた。

親父が奥へと進み、

カーテンを開ける。

窓から風が入る。

夕日に染められた

白いカーテンは

風に揺れて

優しく光った。

温かい異世界の境界線。

ただし、一方通行で

あっちの世界にいけば、

二度と戻れない。

こちらからいくのは

簡単なのに、

戻ってきた人は

誰もいない。

「あら、あなた」

彼女はそう言った。

「ごめん、寝てた？」

「ううん、窓から

夕日を見てたの。

綺麗でしょ」

にこやかな笑顔で

彼女は親父を見た。

それから僕に気づき、

「そちらの方は？」

「おお！！そうだった…」

（親父は一瞬、

悲しい表情を浮かべた）

「前に話しただろ。」

昔、近所に住んでて

よく一緒に遊んでた子！

見舞いに来てくれた」彼女は僕の顔を

じっと見たが、

済まなそうな顔をした。

「ごめんなさい。」

私覚えてないわ」

「大丈夫ですよ。」

小母さんさん、僕は

覚えてますから。

小さいときに

遊んでいただき

有難う御座いました」

僕は彼女にお辞儀をした

「本当に

ごめんなさいね。

お見舞いありがとね」

「いえいえ」

「じゃあ、俺達は

これで帰るな」

「あら、もつと居れば」

「いや、ちよつと

野暮用があつてな。

二人でいかないと。
明日も来るからな」

「そう」

彼女は寂しい顔をした。

親父が病室を

出て行こうと

歩き始めた。

僕もついて行こうと

したが、彼女が僕の

手を掴んだ。

「また来てくれる？

昔のこと思い出せなくて

きっかけが欲しいの」

彼女はうつむいた。

「私が、思い出せなくて

あの人に迷惑かけて

ばかりだから…」。

早く元に戻りたいの」

悲痛な訴えだった。

僕の感情は大きく

揺れた。

その震えた声は

僕の胸に深々と

突き刺さり、えぐった。

血がほとばしるように

僕を吐き気が襲った。

胃から戻ってくる

自責の念と黒い塊と

激しい吐き気を

我慢して

「また来ます」

と声を振り絞った。

「ありがとう。」

絶対にまた来てね」

彼女は僕の小指と

自分の小指をとって

「ゆびきりげんまん」

と笑った。

（僕は覚えてますよ）

病室をあとにした僕達は

駐車場に向かった。

二人は黙ったまま。

エレベーターでは

さっきの女性が

笑顔で乗っていた。

「何階ですか？」

明るい声で聞かれた。

親父は「一階です」

とだけ答えて

黙った。

駐車場につき、

車に乗り込んだ。

「良くなったの？」

僕は親父に聞いた。

「ああ、多少な」

親父は素っ気なく言った

「少しずつだけど

記憶が戻ってきている。

が、重要な「息子」に

ついては戻らない。

お前には悪いが…

医者がいうには

ショックの原因を

なくすことで安定を

保っているそうだ」

一瞬、間があいた。

「医者がいうには

多分、その部分に

ついては戻らないだろう

と言っていた」

「そうか…」

「お前のことは

養子縁組みする

予定の知り合いの子と

して今日紹介した。

医者は会うのは

止めたほうがいいと

言ったが俺が

かなわないからな」

「僕は別にいいけど…

思い出さなくても」

（彼女が壊れて

しまわないのならそれで）

「俺がかなわない！

あいつがお前の記憶を

戻さなきゃ…

息子として接していいか
養子縁組みした息子として接すればいいか、
混乱する！！」

僕は少しおかしかった
ので笑ってしまった。

「何が可笑しいんだ？」

親父は不思議そうな
顔をした。

「だって…どちらも

同じ息子だろ」

「そうだが…」

「同じように

接すればいいよ。

同じ息子なんだから。

母さんには違うように

見えても何年もすれば、

どちらの区別もなくなる

僕が親父の立場なら

そう思うな」

困ったように親父は

「じゃあ立場を

交換してくれ」

二人で一緒に笑った。

が、二人とも心の底からは
笑えなかった。

二人とも目は悲しい色を
していた。

「お前は優しいな。
が、優しすぎる。

俺がもつとしつかり

していれば…」

「それは違うよ…」

僕が弱くて

子供だったから…

もつと大人だったら！」

「お前はまだ子供だろ」

親父は真剣な目で

僕を見た。

「子供を守るのが

大人の役目だ。俺は

それが出来なかった。

お前を守れなかった。

悪いのはお前じゃない。

俺だよ。だから

お前は優しすぎる。

たまには人のせいにしても誰もお前を責めないよ」

「親父も優しすぎるよ」

「そうかあ？」

とぼけた感じで言った。

「そうだよ」

「なら胸に飛び込…」

「それは断る」

また笑った。

親父は

シートベルトをして

「帰るぞ」

帰りは二人とも

黙って考えていた。

二人とも共通したことだ

もちろん、

母さんのことだ

八週記念 カリスマとflow

高二の夏休みは
僕に新しい出会いと
新しい習慣をつくった。
毎週、頭をひねりながら
考えて描く小説を
彼女に読ませる。
ついでにクロの散歩。
普通の猫はしないが
クロは何故か行きたがる。

こうした新しい出会いも
ありはしたが、日が
経てば学校が始まる。
始業式は終業式と
変わらず、蒸し暑い
サウナのような体育館で
校長や生徒指導部の
話を聞いていた。
みんながみんな、
少しでも暑さを
やわらげようと
間隔をできるだけ空けて
風通しをよくしようと
するが、汗と校長の話しが
皮膚から、または
耳から耳へと

景気よく出て行った。

始業式が終わり、

体育館から生徒達が

口々に不満を言いながら
出て行った。

僕も体育館の出口に

向かって歩いていたら、

後ろから呼ぶ声が

聞こえてきた。

「おい！！」

一人の男子が

手を振りながら

近づいて来た。

「ここにいたのか。

探してしまった」

同じクラスの

タイラだった。

「おお！タイラ！！

終業式以来だな」

「そうだな…

って！どうして

僕のメールを

無視したのだ！？」

「いつしたんだ？」

僕は首を傾げた。

「7月のおわりぐらい。

海行こうってメールした

のに返ってこないから

海行けなかったのだよ」

ひどく残念そうな顔で

僕に言った。

「他の人を誘えば
良かったじゃん」

「愚かなり！僕と君
でなければダメなのだよ」

「どうして？」

「どうしてっ！！！」

タイラは叫んだ。

前に行く女子二人が
驚いてこちらを見た。

「君にはわからないのかい？青い海！照る太陽！さらにさらに……」

タイラは身を縮めてから

大きく両手を広げた。

「水着の美女！！！」

「が、僕と何の関係が？」

胡散臭そうな顔をした

僕がタイラに聞いた。

「僕と君の

気品漂うカリスマ美男子ならナンパでごまんと女の子が寄って来る
ではないか。

カリスマフラッシュ」

タイラはその場で

くるっと体を回転させ、歯を煌めかせた。

確かにタイラは

カッコいい。

が、性格のとおり

彼女ができない。

というか女子を寄せ付けない。

僕とは性格があまりにも
違い過ぎているためか
お互いに尊敬に近い
感情で一緒にいる。
僕はタイラの
自分に対する自信の
持ちように感服する。
（逆にしないほうが
おかしいと思える）
彼曰わく、彼は彼で
僕の謙虚な姿勢を
尊敬している？らしい。
彼の必殺技、
カリスマフラッシュは
幾多の死線を越えた
武者達でさえ、
その眩しい笑みに
戦意を失うだろう。
他にも必殺技を
考えているらしく
僕に時々披露するが
僕のリアクションにより
必殺技にしたり
しなかったりする。
だいたいがボツである。披露された僕は
どうリアクションするか
対応に困り、気を
遣うのでこっちが
よく疲労する。

そんなタイラだが
人望はあつい。
彼から学べるのは
そのカリスマ性。
彼は支持率95%で
生徒会長になった
強者である。

ここまで色々と
彼について語ったが
彼を一言で表すなら
「残念天然カリスマイケメン」である。

「さあさあ、教室に
戻ろうか。
また暇なときに
誘ってくれよ」
「了解した。
では明日なんて
どうだい？
何か運命を感じる
日ではないか！？」
「さすがにそれはない」
「そうかい？
では明後日……」
「いや、やっぱ
僕から連絡するよ」
「了解した！
連絡を受け取って……
あげなくもないがね！」

「ごめん、どっち？」
教室に着いて
席に座るとちょうど
開始のチャイムが
響いた。

帰りのSHRが終わり、
タイラと一緒に
駅に向かって
歩いていった。

「今日は遊びに
行ってもいいかい？」
僕に積もる話しも
あるだろう？」

「はあ？」
「すべては
わかってる。

この夏休みの出来事を
とくと僕に
聞かせたいんだね！」

「いや……」
「案ずるな。
邪魔はしない。

君の語りを
妨げるようなことは
一切するつもりは……
あるようでないね」
「そう……まあ別に
いいけど」

二人でアパートまで

来ると大家さんが

僕達を待っていた。

「おかえりなさい。

あら、タイラ君！

お久しぶりね」

「お久しぶりです。

お元気でしたか？」

「まあまあね。

じゃあ、なるべく早くに

帰るのよ」

「了解しました」

僕達は部屋に入った。

するとクロが

近寄ってきて

出迎えてくれた。

「おお！！なんだい！？

一体どうしたんだい？

猫なんか飼って」

「まあ、お茶飲みながら

話そうか。あがつて」

「お邪魔いたそう」

タイラはテーブルに

着いた。僕がお茶を

出すと美味しそうに

飲んだ。

「君が淹れたお茶は

どうも何かが違うね。

誉めてあげなくも

ないがね」

「うん、ありがとう」

「で、これは何だい？」

描き掛けの小説を

指差して聞いた。

「ああ、それ。

最近、小説を

描き始めたんだよ。

読んでみる？」

第一作目を渡した。

「ふむふむ」

タイラは読み始めた。

ものの3分で

読んでしまった。

「らしいね」

「らしい？」

「うむ。君らしい

素晴らしい小説だ。

モデルは

このチビちゃんかな？」

僕の膝で丸くなっていた

クロを見て言った。

「よくわかったね。

クロっていうんだ」

「クロ……」

僕がクロを見つけた

経緯を話した。

「なんとという親子愛……！

心うたれた……！」

それから二人で

夏休みの話をした。

「一体君は僕の誘いをけって何をしていたんだね？」

「課題やつたり、

本読んだり、

公園行ったり、

サッカーやつたり、

小説描いたりかな？」

「なるほど。」

クロはわかったが

小説を始めた理由が

わからない。

どうして始めたんだい？」

「それは……」

僕は言葉に詰まって

しまった。

「……」

「どうしたんだい？」

タイラが僕の顔を

見た。そして何故か

満足げな顔をした。

「なるほど。」

大した理由ではない

ようだ」

するとタイラは

立ち上がった。

「どうした？」

「いや、もう帰ろうと

思ったのだよ。

大家さんに言われた

からには帰らねば。

では、また明日。
小説、頑張ってくれたまえ」
こうしてタイラは
帰った。彼はいつも嵐のように
僕を巻き込み、
嵐のように去っていく。

次の日の放課後、
学校の図書室の机で
小説を描いていた。
タイラも僕の前で
一人でしゃべっていた。
しかも、しゃべりながら
本を読んでいた。
「なんとっ！！
そういうことか！
騙されたぞっ！！」
図書教諭が後ろから
睨みつけているのにも
気づかずに叫んでいる。
周りのメガネをかけた
女子二人組も
何事かとこちらを見る。
「あのさ、タイラ…
悪いんだけど
声を出さずに
読んでくれない？」
とぼつちりを喰うのを
避けるためにタイラを

注意した。

「何をいつつ！

これが叫ばないで
いられるだろうか！

カリスマたるもの

書に親しまなければ、

心が豊かでなくては！！」

タイラは熱弁した。

僕が呆れた顔で

「推理小説でも

読んでるの？」

「見たまえ！！」

読んでいた本を

僕に見せる。

「この蝶になる、

というところは

灯台下暗しと

言わんばかりの

貴族が庶民の生活を

しらないというような

展開ではないか！！」

「はらぺこあ むし……」

僕が口に出すと

図書教諭と

女子の一人が

大きく吹いた。

タイラが周りをみて

「さあさあああ！

皆も僕のように

淡々と書をひもといて

くれたまえ」

「ハイハイ」

僕は自分の仕事に戻った。

帰りもまたタイラと

帰ったが今日は

遊びには行かないと

言った。

「君の小説の邪魔になるだろうしね。

カリスマ性をうちに

秘めた大作を心から

待っているよ」

別れ際、ホームで

僕に言った。

彼の要求には

応えられそうにもないが

彼からの激励もあり、

小説を早めに仕上げた。

始業式から土曜日が

一気に過ぎていった。

「こんにちは」

彼女はベンチにいた。

何故か僕はほっとした。

僕は腰掛けながら、

「先週は来なかったね。

暑かったから？」

すると彼女は
眉間にわずかに
シワを寄せた。

「先週？一緒に
話したじゃない。

また来てねって
別れ際に言っただよ」

「？」

僕も彼女と同じ顔に
なってしまった。

「先週、僕は3時まで
ここにいたけど

君来なかったよ」

「そうだったかなあ」

彼女は人差し指を
顎にあて上目になった。

「まあいいつか。

今週の小説読ませて」

僕は彼女に渡した。

彼女がよんでいる間は
僕は持ってきた小説を
読み始めた。

あるとき、あるところ、
人間の知らない世界に
時の流れを司る神様が
いました。

神様は毎日人達の

楽しそうな生活を
羨ましそうに
見ていました。

神様がいる世界には
神様がたった独りで
暮らしていました。
だから友達が欲しくて
欲しくて仕方が
ありませんでした。

だけど、神様は
とても臆病で
なかなか行けずに
いました。

ある日、勇気をだして
人間界におりた神様。
草原に独りぼつちで
たたずんでいると、
小さな小さな女の子が
近付いてきました。

「あなたは誰？」
女の子は尋ねました。

「僕は神様だよ」

「かみさま？」
ひとではないのは
わかるけど、かみさま？」

「そうだよ。君は？
独りなの？」

「一人だよ。だけど

いまは二人だね」

二人は仲良くなり、
友達になりました。
その草原に家を建て、
二人で仲良く、
毎日毎日笑って
過ごしました。

しかし、女の子は
大きくなり、美しくなり、
そしておれ、
小さくなりました。
女の子は歳を
とっていきました。
女の子は神様を
寝ているベッドに
呼びました。

「お別れみたい」
弱々しく女の子は
言いました。

「いけないで！！
僕をまた独りに
しないで！！」

神様は泣きながら
言いました。

「大丈夫。あなたは
独りじゃないわ。
私とずうと一緒。
思い出のなかで

ずっと一緒」

神様の手を握って
言いました。

「だから、泣かないで。

神様なんだから

しっかりしてよ」

神様の涙を拭って

微笑みました。

「幸せだったよ。

独りぼっちだった私を

みつけてくれて

ありがとう。

さよなら…」

女の子の白い

シワだらけの手は

ゆっくりと神様の手から

離れていきました。

神様はいつまでも

泣きました。

「時を戻そう」

神様は考えました。

「こんなに心が

痛むのなら

出会わないようにしよう」

神様は時を戻しました。

そして、神様は自分の

世界に戻りました。

以前のように独りで

人間界を見ていました。

人間界にはおらずに

女の子を見守っていました。

女の子と神様が

出会った時間が

過ぎました。

女の子は独り草原を

さまよっていました。

ついに女の子は

死んでしまいました。

神様はもう一度、

泣きました。

そしてもう一度、

時間を戻し、

女の子に会いに

人間界におりました。

「あなたは誰？」

「僕は神様」

女の子は再び歳を

とりました。

「さよなら…」

二度目のさよなら。

神様は悲しみをこらえて

こたえました。

「さよなら」

神様はその後、

女の子の思い出を胸に人間界で

ひっそりと旅を
はじめました。
女の子のような
独りの子を
つくらないように…

「悲しいね…」

彼女は僕に

原稿を返した。

「私も時々思うんだ。
時を戻したいって。

出来ないとわかって
いても思ってしまう。

出来ることなら

生まれる前までね」

彼女は立ち上がった。

「こんなことに

言っただの初めてだ」

僕を振り返り言った。

「生まれるって

すごく不幸なことだと
思わない？」

僕は何をいったら

いいか分からなかった。

「死を最初から

決められていて、

死の恐怖から

逃げられないで

苦しまないといけない、

不幸だよな。

生きるって苦しいよね」

彼女は素顔になった。

哀しげに笑う。

それが素顔だと

思うのは何故だろう。

僕はそれを見て

口を開いた。

「でも」

彼女は素顔のまま

僕を見た。

「僕は不幸だと

思うけど、幸せだとも

思う」

「どうして？」

「よく分からないけど…

だから生きるのを

やめないんじゃない」

「そう…かな」

「だから君もまだ

ここにいるんじゃない？

ここに生きてる」

彼女はまた座った。

「もし、いま私が
消えたらどうする？」

「日曜日が寂しくなる」「なにそれ」
彼女は微笑んだ。

「ありがとう」

その儚い顔は誰かを
想わせたがはつきりとは
分からなかった。

「また来週、来てね」

彼女はそう言って
公園をあとにした。

九週記念 高校生

彼女は何かに…

縛られている、

そんな気がした。

でも、それに触れるには

僕はまだまだ、

彼女にとっては

他人でしかないのだ。

だから、僕は

何も出来ることはなく、

ただただ日曜日の午後の
数時間だけ隣にいるしか
出来ないのだ。

黒い影につかれた人を

本当に理解出来るのは

黒い影につかれていた

人しかないのだ。

彼女を理解するには

僕は役不足なのだ。

それって…

これは何ていう

気持ちなんだろうか？

「おいっ！！」

我に返ると

教室全部の視線が

僕に集中していた。

「何故上の空だったのかね？今は出し物の審議中だよー！」

「ごめん、タイラ」

僕は教卓に立つタイラに

謝った。

「ふむ、悩みに暮れる

青春の一ページー！」

なんという輝き。

それもよいだろう。

しかしながら今は

文化祭という

高校生の一大イベントに

熱意を向ける

一ページが僕は

みたいなぁ。

なぁ、みな、そうだろう」

「「「そうだ！ー！」「」」

クラスが叫んだ。

「我がクラスで

最優秀賞をとろう！ー！」

最優秀賞とは

学校の中で一番人気が

あったクラスに

贈られる賞のことで

どのクラスも

賞をとるために

団結して出し物を

考え、創るのだった。

こういう場でも

タイラは活躍する。

「では、みな！！
何かよい出し物を
提案してくれたまえ！
書記の峰くん、
頼んだよ」
「はいはい。
みんな、どんどん
言っててね」
峰さんが白いチョークを
持つて言うともみんなが
次々に言っていた。
中でも多いのが
お化け屋敷が
ダントツに多かった。
タイラは教卓から
僕の前の席に座った。
「何を考えて
いたんだい？
悩み事を聞くのも
カリスマの役目。
どんどん話して
くれたまえ！！」
キラキラとした
長い黒髪を流して
僕に言った。
「うん。
タイラに話してもな」
「なに！？僕が
信用ならないのかい？
僕はいつでも真剣に

裸でぶつかっていくよ」

「信用はしてるけど…」

「なら、迷わずに

僕に心の内を

さらけだすんだ」

「そこまで

言うんなら…」

素直にタイラに

「人の気持ちを

理解するにはさ、

やっぱり相手と

同じ立場にならないと

本当の意味で理解は

出来ないじゃん？」

「ふむ、全くその通り」

「だから相手に

何かしてあげたいと

思うなら相手と

同じ立場になつてから

じゃないとダメだよな、

って思つてさ」

「全く、君は

高校生らしくないね」

タイラは溜め息を

ついた。「なんだよ、それ」

ちよつとムツとした。

「いいかい？僕達は…」

「タイラくん！！」

タイラくんは

何がいい？」

峰さんが顔だけを

こちらに向けて

聞いてきた。

「そうだな…

たこ焼きが今、

むしょーに食べたい」

タイラが答えると

「たこ焼き…

それだっ！！

いいぞっ！！タイラ！！」

何故かクラスは

大騒ぎになり

タイラを胴上げした。

タイラはタイラで

ハハハハハと

優雅に舞っている。

このように僕達の

クラスはタイラの

一声でたこ焼きを

やることに決定した。

タイラの魅力が

時々怖くなる。

夏休みから一週間は

文化祭に向けての

準備期間となる。

授業は一切なし。

教師も教師で

生徒達の監督で

そんな暇はなかった。

生徒達は近くの

スーパーにいき、

ダンボールや

その他の材料を

あさっていた。

スーパーの人達も

快くダンボールをくれた。

クラスは三グループに

分かれて仕事をした。

店の内装のグループ。

衛生、広告グループ。

メニューを考えて、

試食するグループ。

だいたいが内装に

回ったがタイラが

僕の料理が美味いと

言ったのでメニューを

考えるグループになった

タイラはただ単に

食べたいから僕と

同じグループに。

他には峰さんと

あと中島さんという

大人しい印象の子で

クラスにいても

あまりしゃべらない。

「花はとても料理が

上手なんだよ」

峰さんが中島さんの
両肩に手を置いて
僕達に言った。

「そんなことないよ」

小さな声で否定した。

「何をいう僕の相方の
料理の腕にかなうわけが
なかろう」

「いやいや花の方が
すごいよ」

「いやいや……」

「タイラ、早くメニューを
考えようよ」

「そうだね」

ちやちやと考えて
早急に食べようじゃ
ないか!!」

4人でメニューを
話し合った。

峰さんが頬杖をついて

「やっぱり文化祭だから
普通のたこ焼きじゃ

つままないよね」

「そうとも！

何か気品溢れる

たこ焼きが食べたいね！

例えば：caviarなんて
どうだい？」

「無理デス」

峰さんとハモった。

「却下かい。」

では中島くんは

何かあるかね？」

中島さんは数秒間

うつむいたあとに

小さな声で

「チーズとか

明太子」

「いいね、それ！」

僕が同意した。

「ありがとう」

さらにうつむいた。

「チーズと明太子か。

あと普通のたこと…

ねえ、チヨコとか

どうかな？デザート

感覚で」

「いい考えだね峰くん。

ではチーズと明太子と

チヨコの三品でいいか

みなに聞いてみよう」

タイラが黒板に

メニューを書いて

「皆の衆、メニューは

これでよろしいか！？」

すると教室から

賛成の拍手が

沸き起こった。

クラスがタイラを

崇めているみたいだった。峰さんが僕に

「タイラ君て

すごいよね。

どうしてあんな風に

出来るんだろう？」

「さあ」

「タイラ君、

人生で不幸な時

なんてもの

なさそうだよね」

「確かに」

「何だい、僕の話しかい？」

いつの間にか後ろに

タイラがいた。

「明日、材料を持ってきて

試食会をするから

準備を頼むよ。

僕は調理室の許可を

とってくるよ。

では、明日。頼んだよ」

タイラは教室から

出て行った。

「じゃ、私帰る」

峰さんは荷物をまとめ

すぐに帰った。

残ったのは僕と

中島さんだった。

「中島さん、

クッキング同好会だっけ？

料理が好きなんだね」

「うん、でも下手だよ」

「そんなことないでしょ？」

中島さんは激しく首を横に振った。

でもすぐにやめて

僕を見て、

「タイラ君が

言っただけど

料理上手なの？」

「あゝあ」

僕は頭をかきながら

「上手いかは

分からないけど

一人暮らしで

料理してるから

多少はね」

「一人暮らしなの？」

「まあね」

「珍しいね。

高校生で一人暮らし」

「いろいろとね」

話題がつきてしまった。

二人の間に何か

気まずい雰囲気が

流れた。

逃げるように

僕は立ち上がり

「じゃあまた明日。

たこ焼き頑張ろう」

「うん。じゃあまた」

家に帰るといつもの
ように大家さんが

待っていて

「おかえり」

「ただいま」

「お兄ちゃん!!」

ようがタタタタと

駆け足できた。

「あれ？学校は？」

「今日は開校記念日で

お休みなんだ」

「そっか」

「次の土曜日と

日曜日、ぶんかさい

なんでしょ？

ばあちゃんと

一緒に行くから」

日曜日：

「あつ!!」

ようが首をかしげて

僕をみる。

「どうしたの？」

「お姉ちゃんに

日曜日は行けないって
いうの忘れてた」

何も言わないで

彼女を待たすのは

あまりにも

失礼というか、

なんというか…

「そうだ。お姉ちゃんも

一緒に連れて行くよ。

ね、ばあちゃん？」

大家さんを

振り返ってようが

聞いた。

「そうだねえ。

別に大丈夫だろうね。

一緒に行こうか」

「やった！！」

ようは跳ねて

喜んだ。

「ところで

出し物は何を

やるんだい？」

「たこ焼きを売ります」

「たこ焼き！！

僕大好きだよ！！

いっぱい買っね」

「ありがとう」

夕方のアルバイトでも
大将が

「土日が文化祭
なんだって？」

「はい」

「俺達も行くよ。
何やるんだい？」

お客さんが
聞いてきた。

「たこ焼きを売ります」

ナカオカさんが
奥から

「そりゃあいいな！！
酒とあいそうだ」

「ナカオカさん、
高校生の文化祭じゃ

酒は出ませんよ」

女将さんがそう
ツツコむとナカオカさんは

「そうか、残念だ」
と本当に残念そうに

言ったから
店内にいた人達全員が

明るく笑った。
ナカオカさんも

照れたように笑った。
勿論、その夜も僕は

ナカオカさんを
おぶって帰った。

「では試食を
始めようか」

「タイラ君、

試食の前に

つくらないと」

峰さんは呆れ顔をした。

「失敬！気持ちの

焦りだよ。さあ、

淡々と作っていいこうか」

安売りしていた電気の

たこ焼きプレートに

といた小麦粉をいれた。

そこに一口サイズに

切ったタコとねぎ、

紅しょうがをいれた。

峰さんはチーズを

タイラは明太子、

中島さんはチヨコを

それぞれ入れた。

数十秒後、まわりが

焼けて固まってきた。

「それではくると

いこうか」

タイラの合図で

一斉にたこ焼きを

裏返し始めた。

僕はスムーズではないが

上手く裏返せた。

が、峰さんとタイラは

グチャグチャになっている。

「案外難しいね」

「そうだとも。」

が、中島くんは素晴らしいね」

中島さんを見ると

丁寧に一定のリズムで

綺麗にたこ焼きを

裏返している。

全部が綺麗なキツネ色をしていて綺麗な丸。

「中島さん、上手だね」

「え、そう…かな」

プレートが熱いからか頬を赤くしている。

「花、ホント上手だね」

「はっ！！！」

タイラが何か

ひらめいたように

ビクツとした。

「どうしたの？タイラ君」

タイラは天を仰いで

「神の啓示だ…」

「「は？」」

僕と峰さんが

ポカーンとした。

「中島くん！！」

僕の全権を使つて君を世界のたこ焼き大臣に任命するっ！！！！」

「「あほか~~~~!!!!」」

そんなこんなで

タイラクラスは

決戦の日を迎えた。

文化祭開始と同時に

客が入り始めた。

お昼にはなんと

長蛇の列が出来るほどで

すぐに材料がなくなり

閉店する騒ぎとなった。

2日目もその人気は

衰えることはなかった。

大将と女将さんは

午前中の早いときに

きた。

「打ち上げはうちにきな。

美味しいもん出すよ」

と耳打ちした。

ナカオカさんも

そのあとに来てくれた。

「ホントに酒は

ないんだなあ」

と関心していた。

三人共、おいしいと

喜んでいた。

お昼過ぎてから

ようが大家さんに
連れてこられた。

「繁盛してるね」

「お兄ちゃん、

たこ焼き!!」

「ハイハイ」

僕はまわりを見た。

「あ、お姉ちゃん、

来ないって。

遠慮してたよ。

楽しんでねって

お兄ちゃんに伝言」

「そう…」

「じゃあお兄ちゃん、

大きいところに入れてね」

「分かったよ。

うーんと大きなの

入れとくよ」

彼女は どうして

来なかったのだろうか？

「皆、二日間よく

働いてくれた!!

誉めて遣わそう!!

こんなにも盛況

だったのは皆の働きと…

僕のカリスマのためだね」

実際にタイラの
影響もある。
タイラを見ようと
一年生女子が
何個も買っていった。
「我々は目標通り…
最優秀賞を
手中に収めた！！
今日は宴だ～～！！
乾杯！！！！」
「「乾杯！！！！」」
バイト先で飲み食い
するのは何か不思議な
感じがした。
いつもは
働いているから
注文するのも
食べるのも
新鮮だった。
二時間ばかり
みんなで騒いだ。
僕達のテーブルは
試食グループの
4人で色々と
話した。

打ち上げが終わると
店の前で流れ解散。

僕は片付けを手伝おうと

最後まで店にいますと

大將が

「片付けはいいから

今日は帰りな」

「え、でも」

「いいんだよ。

今日は高校生らしく

してこいよ」

半ば無理やり店を

出された。

外ではタイラと、

何故か中島さんがいた。

「帰るかい？」

「ああ」

「ちよつと、いい」

振り向くと中島さんが

僕の腕を掴んでいた。

「じゃあ、僕は

少し先で待っているよ」

タイラはあくびをしながら闇に消えていった。

「輝いているね」

とぼそりと残して。

闇夜にかすかに
秋の虫の聲が
聞こえてきた。

十週記念 傷ついた・花束（前書き）

お互いを知るにはまずお互いの過去を知る。他人を知るには他人の過去に踏み入れる。そうすれば完璧でなくとも他人を理解できるはずだ。

十週記念 傷ついた・花束

中島さんは僕が

立ち止まると

掴んだ手をそつと離れた

「ごめん、突然」

中島さんは片方の腕で

自分の体を抱いて謝った

「別に大丈夫。

家近いから」

「お母さんが

心配するんじゃない？」

いつも家で

迎えてくれるのは

大家さんだ。

「大家さんが

心配するかもね」

中島さんは

顔をあげて

キョトンとした。

「一人暮らしなの？」

「まあね」

「高校で？珍しいね」

「色々とおあってね」

色々だ。本当に。

中島さんは

そこから先は

質問しなかった。

家庭的な問題だと

思っただろう。

周りを見渡して

「近くに落ち着いて

話せる場所ある？」

「ちよつと歩くけど」

「連れて行って」

僕らは暗い夜道を

歩いた。

僕より数歩離れて

中島さんがついてくる。

二度と来ないと

心に決めていたけど

すぐに思いついたのが

いつもの場所だった。

もちろん一人もない。

ベンチについて

僕らは座った。

かすかな風が吹き、

水面に波がたつ。

しばらく黙ったあと

中島さんはきりだした。

「本当に突然でごめん。

だけど伝えたくて…」

私の気持ち。前から…

ポツリポツリと

語り出した、自分の

気持ち。せき止めていた

ダムが壊れたように、

滝のように流れ出す。

ただそれは
一方的であつて、
受け止めるものは
どこにもなくて
目の前の池みたいに
自分の中に還つて
きてしまう。
僕も同じなんだろうか？
結局は自分の
気持ちだけで
相手の黒い水には
触れないで
伝えてしまふのだろいか
座つて反対側を見ると
白い影がぼんやりと
浮かんでいる。
けど、まばたきしたら
消えてしまった。
「ごめん。僕は
付き合うとか
出来ないんだ」
中島さんが
話し終わると僕は
言葉を選んでいた。
「どうして？」
中島さんが
僕の顔を見た。
お互いに
見つめ合った。
中島さんの瞳は

透き通っていて
何の陰りもない。
それは違うんだ。
僕がみている世界では
なくて、もつと綺麗な
世界をみている。
「バイトとかで
生活費を稼がないと
いけないし。
忙しくて滅多に
会えない。
そんな中途半端じゃ
悪いし」
そんな理由なのか。
嘘に決まっている。
日曜日なんてずっと……
いつも隣に座っている
彼女を思い出してみる。
ただ彼女の姿は
フワフワしてて
遠くて輪郭がぼやけて
曖昧だ。どんな顔かすら
ぐちゃぐちゃで
わからない。
生きていないみたいで
そこにいないみたいで
ただ悲しげだ。
それはやはり僕が
踏み込まないから、
他人だからなのだろうか？

「会えなくてもいい。
帰り道とか、

少しでも一緒に
居てくれれば……」

「それは中途半端で
苦しいよ。お互いに
良くないと思う。

第一、僕は君のこと
あまり知らない」

中島さんは必死に

「これから知ればいい。

私は……」

僕を知っている。

と中島さんは言った。

優しいところ、

真面目なところ、

頭がいいところ、

タイラも信頼していて

二人とも仲がいいところ

僕を知っている。

僕を知っている？

僕を知っている！？

僕は本当にそれだけか？

そんな綺麗なヒト

なんだろうか？

「どうして

一人暮らしなの？」

白い影が遠くから

僕に質問してきた。

気持ち悪い。

吐きそうだ。

感情が入り混じり

頭がガンガンする。

「ごめん！！

本当に無理なんだ」

僕は立ち上がった。

急に立ち上がったから

中島さんはビクツと

身を震わせた。

中島さんも

立ち上がる。

「そう。私じゃ

いけないんだね」

「あ、そういう意味じゃ……」

中島さんは笑顔で

「大丈夫。ごめんね。

じゃあまた。学校で」

中島さんは歩いて

いつてしまった。

力なく座った。

誤解されてしまった。

池を見つめた。

何もないのは確か。

だけどあの日の

水の温度を感じた。

やはり生暖かくて

気持ち良いとは

言えなかった。
だけど。

公園を一人うつむき
歩く。まだ朝は遠いのに
草達に露がついていて
重そうに身をまげて
いた。

誰かの気持ちの
落とし物。

家につくと

やはり大家さんが
やきもきしていた。

「お帰り。遅かったね」
「すいません。」

打ち上げの片付けを
手伝ってました」

「そう。ならいいわ。
おやすみ」

「おやすみなさい」

バックから鍵を
取り出そうとしたが
鍵がなかった。

いくら探してもないから
ためしにノブを
回すと開いていた。
鍵を閉め忘れていた

ようだ。

「ただいま」

「おかえり〜!!!」

「ゲっ!!!?」

目の前には

フリフリのエプロンの
タイラがいた。

「なにやってんの?」

全身が固まった状態で
僕は聞いた。

「愚問だよ!

これから二次会の
たこ焼きパーティーだ!

その準備を

正装で行っていた。

その今まさに

君が帰ってきて

お出迎えをしたまで」

「そうなの…」

あまりの疲労感に
ため息が出た。

「どうした?

青春をしてきたのでは
ないのかね?」

「青春ね…」

たこ焼き食べながら
話すよ」

中島さんとのことを

全て話した。

「ふむふむ。そうか」
もぐもぐと

タイラは頷いた。

僕は罪悪感で

あまり食べる気には
ならなかった。

「結局、僕は

傷つけることしか

出来ないのかなあ？」

タイラはかぶりを
ふった。ヤレヤレと
いった感じで

「前の出し物決めの時、
言いそびれてしまったが
僕達はまだ高校生だ」

たこ焼きを

ひっくり返しなが

らタイラは続けた。

「気持ちや心は

若いから移ろいやすい。

このたこ焼きのように」

今度はたこ焼きの

焼きあがった生地を

プスプスと刺して

「気持ちや心は

傷つきやすい。

まだ若いから」

そしてタイラは
丸くきつね色に

なつた2つのたこ焼きを
皿に移して

「だけど、

傷ついたり

変わったりしなければ

冷めて固くなる。

それじゃ美味しくない。

だから時には

傷ついたり

傷つけたりしなきゃ

美味しいたこ焼きには

ならないんだよ」

僕は笑った。

「意味分らないな。

たこ焼きに例えると」

タイラはまっすぐ

いつになく真剣な目で

僕をみた。

「つまり、傷つけないと

生身の人との交流は

始まらないよ」

僕は少しだけ

黙って考えた。

「でも…」

有無を言わさずに

タイラが手で

話すなと合図した。

「僕だってそうさ。

色々な人の思いを

踏みにじったからこそ

今の自分がある」
何かを思い出すように
タイラは宙を見た。
「勿論、君とだって
最初は踏みにじったさ。
だけど今はどうだい。
二人で仲良く
たこ焼きパーティーだ。
怖くても一歩を
踏み込まなければ
赤の他人。そうだろう？
傷つけても踏み込んだら
もう特別な人だ」
ひとつたこ焼きを
口に放り込んで
タイラは笑った。
「僕はそう思うよ」
クロが僕の膝に
すり寄った。
頭をなでてやった。
「そうだな」
今なにを
しているのだろうか？
「たこ焼き…
美味そうだ」
僕はたこ焼きをひとつ
口に入れた。
熱くて、舌が
やけどしそうだ。
だけどトローとした

中身は僕の舌を
優しく包み込んで
たこの旨味を
しっかりと伝えた。
「ところで今日は
どうすんの？」
「泊まるのさ」
「だと思った」
僕は苦笑した。

隣でタイラは寝ている。
朝4時近く。
朝食をつくるために
起きる。
カーテンから
昇りかけている
朝日がわずかに
漏れている。窓をあける。紅ではなく
青空のような朝の
空気が外に満ちている。
空をみて、
今なにを
しているのだろうか？
まだ寝ているだろうか？
どんな夢をみてるのか？
寝癖はどんな感じ
なんだろうか？

どんな人生を
歩んできたのだろうか？
どんな子供だったのか？
黒くてもいい、
触れてみたい。
そんな風に初めて
想った。

学校では文化祭の
片付けがあつた。
中島さんは普段通りに
見えた。中島さんが
峰さんと笑っているのを
見ると少しだけ
胸が痛んだ。
だけどそれだけで
あとは何もなくて
中島さんは
他人なんだなと
思った。
クラスには若干、
文化祭のムードが
残ったが10月に
入ってしまったら
また普通になつた。
時間通りにチャイムが

なつて時間通りに
チャイムがなる。
テンポよく時間が
進んでいった。
変わらずに日曜日には
小説を描き上げて
彼女に感想をもらった。
クロはちよつとだけ
大きくなつたらしい。
僕は毎日見ているから
成長なんて
気づかなかつた。
しかし、彼女は
成長に気づいた。
「動物つて大人に
なるのが早いね」
クロは嬉しそうに
彼女に撫でられた。
「もうそろそろ
手袋が必要かも」
彼女は手を摺り合わせ
息を吹きかけた。
僕はまだ
何も聞けなかつた。
機会がきたらと
思っていた。

水曜日。

いつものように
アルバイトに行った。

「お疲れ様です」

大将が活気溢れた声で

「今日も頼むぞー！」

店内は笑いが

絶えなかった。

お客さんは

知り合い、他人問わずに

楽しげに語り合い、

酒を飲んでいた。

「注文たのむ」

店内の雰囲気

似合わない小さな、

そして落ち着いた、

僕を呼ぶ声があつた。

それは奥の座敷から。

「ナカオカさん、

ご注文は？」

「枝豆ともつ煮」

落ち着き払って

オーダーを言う。

いつものナカオカさん

とは違っていた。

「枝豆ともつ煮ね」

僕は紙に書いてから

ナカオカさんの

テーブルを見た。

「今日はお酒は

飲まないんですか？」

「今日はな。

飲まないんだよ」

「そうなんですか……」

言い方に何か

含みがあつたから

僕は少し気になった。

結局、ナカオカさんは

僕のバイト時間まで

酒のオーダーを

しなかった。

店の奥に行き、

帰る支度をしていると

女将さんが入ってきた。

いつものように

夕飯をくれた。

「ナカオカさん、

頼んだよ」

日常会話をした。

が、僕は

「ナカオカさん、

今日は飲んでません。

だから大丈夫だと

思います」

女将さんが

目をちよつと見開いた。

「そうなの」

「どうしてですかね？

こんなの初めてだ。

何か知ってますか？」

女将さんはうーんと

うなつて考えた。

そして何か

思い当たる節が

あつたらしく

「そう言えば…」

この時期だったかな？」

「何がです？」

慌てたように

女将さんが手と

頭を振った。

「いやいや！

何でもない何でも」

明らかに怪しいので

僕は問い詰めた。

「何かあつたんですね？」

「ほらさつさと

帰らないと叱られるよ。

あんたの帰りが遅いと

私達が怒られるん

だからね」

と話をかえて

強制的に店から

出された。

店ののれんをくぐると

あたりはすっかり

暗くなっていた。

寒さが身にしみた。

一度身震いしてから

帰ろうと横を向くと

ナカオカさんが

花束を持って

立っていた。

「これから帰り？」

「そうです」

「いつものように

一緒に帰ろうか」

「いつも酔ってません？」

僕がいうと

ナカオカさんは

柔らかに笑った。

「そうだな。」

「そういえばそうだ。」

今日は特別だな」

ナカオカさんは

歩き始めた。

あとを追って

隣に並んだ。

花束が一步一步

歩くたびにガサガサと

揺れて花の香りが

広がる。いい香りだ。

「花束なんて

ありましたっけ？」

座敷にいたときには

見あたらなかった。

「後ろに置いといたから

見えなかったんだな」

ナカオカさんは

花束を僕に見せた。

花の名前はわからない。
けど、黄色や赤などの
明るい色がそれぞれを
引き立たせていて

見えて

心が華やいだ。

「綺麗ですね。」

組み合わせも

いいですね。誰かに
あげるんですか？」

「娘にな。」

娘は明るい色が
好きだったから
合わせたんだ」

その時、公園の
入り口にさしかかった。

ナカオカさんが
立ち止まったので
僕も止まった。

「ちょっと

寄ってもいいかい？」

公園の暗闇を指差す。

「大丈夫ですよ。

行きましょう」

ナカオカさんは
街灯がなくても
手にとるように
公園を熟知していて
迷いのない歩みで

進んで行つた。

ちょうどナカオカさんが
ボートを貸し出している

大きな池と僕達が

いつもいる小さな池の

分かれ道についた。

ナカオカさんが

小さな池の道を

進もうとしたので

僕は呼び止めた。

「ナカオカさん、こつちじゃないんですか？」

反対の道を指差すと

ナカオカさんは

「いやいや、

こつちなんだよ」

「そうですか」

再びナカオカさんの

隣に追いついた。

「娘さんは

もういるんですか？」

ナカオカさんは

何も言わずに

ただ暗闇を見て

歩いた。

池は月の光で照らされ、

周りがよく見えた。

ナカオカさんは

ある場所で止まり、

しゃがんで

花束をそつと置いた。

そこは池の岸近くで
一本の木のくいが
うつてあつた。

ナカオカさんは
立ち上がると

夜空を見上げた。

「今日は特別な日
なんだよ」

「何かの記念日ですか？」

ナカオカさんは
夜空を見たままで

「いや、そんなものでは
ないけど、記念日と

いえば記念日かな」

「何のですか？」

「娘と一緒にな、

池にボート浮かべて

真ん中で星空を

見たんだ」

ナカオカさんは
語り出した。

「俺は娘が10才のとき

妻と別れた。妻が

新しい男見つけて

出て行った。

娘は何も分からずに

ただお母さんは？

お母さんはどこ？と
聞いてな。俺は
何も言えなかった。
家に帰ると独りきりで
ポツン娘がいる。
その後ろ姿が
寂しそうで悲しかった。
二人食っていくのが
やっただったから
不自由ばかりで
遊びにも連れて
行ってやれなかったから
星が綺麗なこの時期に
ボートに乗せて
やったらすごい
喜んだんだ。
だから、毎年この日に
ボートで星空を
見るんだ。
だから今日は
飲まずにいたんだ」
ナカオカさんは
木のくいを叩いた。
「これはそのとき、
ボートをくくるのに
うったやつだ。
今でも変わらずに
ここにある」
愛おしそうに
目を細める。

その目尻は
かすかに月明かりで
光っていた。
僕はたった一歩だけ、
ナカオカさんに近づき、
その背中を見た。
「娘さんはどちらに？」
「娘はな、１７のときに
突然結婚すると
言い出した。
相手は２５で立派な
社会人だったが
俺は反対した。
娘はまだ高校生だ！！
どこの馬の骨かも
知らんやつには
やらん！！と言った。
数ヶ月後に娘は
家出して妊娠した。
俺に真っ先に報告しに
来たが俺は
お前なんか子供じゃない
この家に二度と来るな
と言って追い出した。
娘が帰って男に
報告すると男は娘を
捨てた。娘は
路頭に迷った。
拳げ句のはてに……」
ナカオカさんは

声につまり次の言葉が出せなかった。

「ここで自殺ですか？」

ナカオカさんは身震いして答えた。

「確かにここは

自殺の名所だが。

娘は交通事故だ。

お腹には子が

いなかった。

産んだのか、

中絶したのかも

わからない。ただ

葬儀のあとで近所で

最近娘を見かけた

という話を聞いた。

俺は後悔した。

どうしてあのとき

家に帰ってくるな

自分の子供じゃないと

言ってしまったんだろう

あの子の帰る場所は

家しかないのに。

俺の子供なのに。

一時の感情で

あの子を追い込んで

しまった」

震える声で

ナカオカさんは

くいをなでた。

「ごめんな」

僕は悲しくなつた。

「どうして

そんな話を僕に？」

ナカオカさんは

僕をみた。

「いつも酔いながら

孫に肩もたれてる

そんなふうにしてな。

嫌かもしれないが

俺にとつては孫みたい

なんだよ」

夜空を指差す。

「ほら、見てみ。

ここには余計な光が

ないから遠い星の光でも

よく見えるんだよ」

僕も夜空を

見上げた。

夜空をよくみたことが

あまりなかったから

その美しさに

胸うたれた。

墨を流した夜空に

点々と輝く星たちが

楽しげに仲良く

お喋りしている。

それを優しく

見守るように照らす月。

にこやかで母性の

象徴みたいだ。

「俺も老い先短い。

いつもの帰りの

恩返しと最期ぐらい孫に

何かしてやりたいな。

何かあつたら

すぐに言つてくれよ」

ナカオカさんは

月のように笑った。

「いつ娘が俺を

呼ぶかわからんからな。

娘は寂しがり屋なんだ。

俺がいないと

いてもたつても

いられない」

娘の寂しがり屋は

ナカオカさんの血の

ようだ。

それを思わせた

寂しげな笑顔だった。

「そろそろ帰ろうか」

ナカオカさんは

僕の肩を叩いて

帰り道を歩き出した。

僕はもう一度だけ

じつくりと星空をみた。

もっと早くこの美しさに

出会っていればと

後悔した。

おじいちゃんは
一体何度この美しさを
体感したのだろうと
考えた。
聞きたい。
そして、一緒に見たいと
思った。
頼みごとはすぐに
決まった。
ナカオカさんの
あとを追った。
その背中はとても
近くて親しげな
優しい背中だった。
「何回星の綺麗さに
感動しました？」
「数え切れないよ」
一番の笑顔で。
誇らしげに
僕にそう言った。

十一週記念 紅葉

ナカオカさんの人生は
想像とは全く違っていた
が、僕と同じような
気がした。

誰もがそうと
いうわけではないけど
何か一つ、

自分の人生を
変えてしまった
重大な事件がある。

それも自らが
きっかけをつくって
しまい、誰かを
苦しめてしまう。

生き続けて
今でもなお自分で
自分を責める。

責め続ける。

なんであのとき
こうしなかったのか？

ifの中でもがく。
もがいてももがいても
楽になることはない。

やめれば楽になるのに
やめかたが分からずに、
いや、やめてしまっ

死んでしまうと
思いこんでいるから
僕達はもがくのか。
もがいている自分に
気づきながらも
いまだに楽には
なれない。

僕達の日曜日は
変わらずにやって来た。
もう秋だ。池の周りの
木々も紅く色付いて
きている。

美しい葉を惜しげもなく
落としてしまう本人達は
その色鮮やかさに
気づいてはいないの
だろう。なんだか
勿体無い気がした。

「そろそろ見頃かな？」
ベンチに座って
落ち着かないように
膝からしたを
ぶらぶらさせる。

子供のような仕草だ。
同時に固定されてない
ベンチがガタガタと
揺れる。落ち葉が
擦れて独特な演奏を
奏でる。

「あ、ごめん。

揺らしてたね」

足を振るのをやめて、
周りを眺める。

「はい」

最後の一行を

描き上げて彼女に

原稿用紙を渡した。

今回はいつもより

長い小説になった。

飲み屋のバイトの

高校生と飲み屋の

常連のおじさんの話し。

僕とナカオカさんを

モデルにした小説だ。

内容も大して

変わらない。

一つの場所を通して

身近な存在に思う。

彼女が読んでいる間、

僕はクロが

落ちてくる葉を

懸命につかもうと

している姿を

笑ってみていた。

クロはじゅっとな葉が

落ちる軌跡をみつめて

自分の頭の上に

来たかと思うと

ぱっと跳躍して

葉をひっかく。

しかし、だいたいの葉が
クロがひっかく前に

ヒラリと優雅に舞って

ネコパンチをよける。

クロがくやしそうに

落ち葉のベッドで

ゴロゴロとしていた。

「おいで、クロ」

そう呼ぶと

耳が動いて

僕を見つめた。

「にゃー」と一鳴きして

僕の膝に飛び乗った。

爪を少しだけたてて

伸びをする。

足場を確認してから

大きな欠伸をした。

その頭を撫でると

従うように

身をまるめた。

クロがちよつとだけ

重くなったことを

感じた。

成長を多少感じ、

何故だか胸が

あつたかくなつた。

子供の成長を見守る

親もこんな感じなんだろうか？

彼女がパサリと自分の
膝に原稿用紙を置いた。
一息はく。

「どうだった？」

再び原稿用紙を

手にとつて

先ほど描いた

最後の一行を

読み上げた。

「他人が

身近な人になる時は

他人の過去を知った時」

彼女は僕の顔を

何か確かめるように

のぞきこんだ。

「本当にそうかな？」

「僕はそう思うよ」

彼女はさらに僕に

近づいてきた。

僕はたじろき

一歩身を引いてしまった

「じゃあ例えば私が

暴力団の組長の娘で

すっごい不良で

いまだに悪いことを

しているってわかったら

あなたはどうする？」

僕はぽかんと

してしまった。

そんな漫画のような

身の上は彼女には
似合わないと思った。
外見からは

全く想像出来ない。

「どうって…」

ありえないでしょ」

「いいから！！」

私がそういう人だったら
を考えて！」

彼女が真面目な顔で
僕に頼んだ。

言われたとおりに

僕は少しだけ

真剣に考えたが

どうするかは

よく分からなかった。

でももやもやするもの、
確信らしいものは

心にあつた。

「わからないよ」

とだけ僕は答えた。

「そんなの嘘。」

普通の人だったら

私から離れていくよ。

だって怖いから。

もし人の過去を知っても
受け入れなければ
理解はできないよ」

彼女は体の向きを
かえて池を見た。

「私が悪いなら
人は離れていく。
生まれや過去で
離れていく」
「でも君は
暴力団の組長の娘でも
不良でもないでしょ？」
「まあね」
「じゃあ、僕は
離れないよ。
君が…」
「ばーん！！！！」
突如、後ろから
何かが現れた。
二人は反射的に
身を震わせながら
ベンチの両端に
それぞれ飛び退いた。
「ははは、びつくりした？
二人とも」
ようが両手を挙げた
驚かした状態で
嬉しそうに笑っている。
「「びつくりした」」
二人はまだ
目を大きく開いて
ようをまじまじとみた。
「お兄ちゃんとお姉ちゃん
びつくりし過ぎだよ。
ほらほらちゃんと

座って座って」

僕達にそう促し、

ようは間に座った。

飛び退いたから

クロは眠りを

妨げられて少し

不機嫌な声で鳴いた。

「よしよしクロおいで」

ようが手招きすると

仕方なさそうに

クロはようの膝に

乗った。

「どうした？」

大家さんから伝言？」

「ううん。違う」

ようは頭を横に振った。

「お兄ちゃんと

お姉ちゃんの二人に

お願いがあつてきたんだ」

彼女がように

優しく聞いた。

「お願いって？」

ようは彼女を見て

うなずきながら

「あのね。

次の土曜日に

サッカーの試合が

あるから観に来て

欲しいんだ。

お兄ちゃんには

いつも遊んで

もらってるから

僕の試合してる姿を

見てもらいたいんだ」

するとようは

ニヤリと意地悪そうに
笑った。

「しかもお兄ちゃんとお姉ちゃんいつも

ここでしか会ってない
でしょ？

デートがてら

観に来れば？」

その言葉で

二人の顔は紅くなった。

「だ、だから

そういうんじゃないんだよ」

僕がそう言つと

ようはふーんとだけ

言った。憎たらしい。

「土曜日に

どこでやるの？」

ようは彼女の顔を見て

「公園近くの

河川敷でやるんだ！！

3時ぐらいからやるよ！」

「わかった。

観に行くよ」

彼女はようの
頭をなでた。

ようはとても

嬉しそうに笑って

「絶対だよ!!!」

指切りげんまん」

そつと小さな小指を

彼女に差し出した。

彼女も白い綺麗な

小指を出した。

「ゆびきりげんまん……」

白い小指とそれより

一回り小さい小指を

あわせて二人で

歌う姿は微笑ましく、

周りの風景に

溶け込んでいた。

一枚の絵画だった。

見た人の心を必ず

温める魔法の絵画。

題名は小さな約束。

「ゆびきつた!!!」

小指同士が

そつと離れたが

見えない糸が

のびているように

見えた。

「じゃあ、

次の土曜日に

河川敷で待っているよ」

クロを抱き上げて
ようはベンチから
立ち上がった。

「じゃあね」

ようが帰ったあと

彼女に聞いた。

「土曜日、大丈夫？」

「用事ないから

大丈夫だよ。

一生懸命

応援しなくちゃ」

彼女はふふふと

笑った。

「ホントの兄弟みたい。

うらやましいな」

「君はお姉ちゃんでしょ」

「そう思ってくれてれば

嬉しいな」

川はゆつたりと

流れていた。

どこことなく河川敷は

他の場所よりか

風が強く感じられた。

斜面の芝生が揺れる。

段ボールをしいて

一番上から滑りたくなる

魔力がそこにはあった。
だが目的はようの
応援なのでピクニックの
シートをそこにひいて
彼女と二人で座った。
人はそこまで多くは
なかったが様々な人が
いた。

サッカーの応援にきた
夫婦や僕達の頭の上を
通る市民ランナー、
段ボールで斜面を
勢い良く滑る小さな子。
空は青く、気温も

激しく動くには
丁度良い、肌寒い程度。

「晴れて良かったね！」

彼女は嬉しそうだ。

ソワソワとしていたから

「楽しみ？」

目を輝かせてあふれる

笑顔で大きく頷いた。

「私、サッカーの試合を

生で見るの初めて！！

どんなのだろう！！」

両手をあわせて

僕にそう言った。

「勝って欲しいね」

「うん！！」

あつ、手振ってる」

サッカーコートの
真ん中のように
飛び跳ねている。
僕達も手を大きく
振り返す。
選手が整列し
互いに礼をする。
じゃんけんで
コートボールを
決めたあとに選手が
それぞれのポジションに
散らばった。
主審が片手をあげて
笛をくわえる。
「始まった！！！」
ボールがチョンと
前に出されたあとに
バックパス。
ボールはようへと
渡った。
ようはドリブルを
始める…
「頑張れ！！よう君！」
彼女は立ちながら
大声で叫んだ。
「いけよう！！」
僕も応援した。
跳んだり跳ねたり、
息を飲んだり、
やった！と小さく叫んだり

拍手をしたりと

彼女は様々な表情を
見せてくれた。

日曜日のあの場所では
見れなかった生きている
彼女を見た気がした。
時々、応援を忘れて
彼女の顔を見つめていた

終了のホイッスル。

「やった！！勝った」

彼女は手を叩いて
喜んだ。

終了の挨拶を終えて

ようがこちらに来ると

彼女はように抱きついた

「お姉ちゃん苦しい…」

「カッコ良かったよ！

よう君！頑張ったね」

ようを離して頭をなでた

「応援ありがとう！！

二人のおかげだよ！」

ようは僕達に御辞儀した

その頭を今度は

僕がなでた。

「頑張ったね。

帰って大家さんに

報告しようか」

「うん！！」

ようは僕と彼女の

手をとって
斜面を駆け上がった。
夕方の河川敷の道路を
三人で手を取りあい、
つながって歩いた。

次の日。

「2日連続で
会うなんて
初めてだね」

彼女はすでにベンチで
待っていた。

紅葉はちょうど見頃。
周りの木が紅一色で
とても綺麗だった。

「あれ？原稿白紙だね」
身をかがめて僕が
手に持っていた
白紙の原稿をみて
言った。

「紅葉見ながら
描こうと思ったんだ」
「いいのができそう」
そう言うと彼女は
欠伸をした。

「昨日の試合で
興奮しちゃったから

眠れなかつたんだ。

出来るまで寝てていい？」

「いいよ」

彼女は目をつむった。

僕は周りの木々を

眺めて話を

想像の中から

作りだそうとした。

池にはやはり僕達だけ。

池に映るのは紅い木々。

時々、何もないのに

波がたつて揺れて

ぼやける。

そしてまた元に戻る。

優しいそよ風が

僕達が座るの大樹の

一枚、たった一枚だけの

紅い葉をさらっていく。

葉はひらひらと

宙で踊った。

遊ぶように。

それを目で追った。

ゆっくり、ゆっくり

身を翻し、右へ、左へ

急降下したり、

ちよつと止まったり

しながらひらひら

ひらひらと。

ふわつと水面に

滑るように着水。

ただいま！と
言わんばかりに
水面に映る自分の
居場所へ戻った。

肩に重さを感じた。
暖かさを感じた。
黒い長い髪。

一定のペースで
気持ち良さそうに
呼吸を繰り返す。
僕もついつい
そのペースに
あわせてしまい、
二人で同時に体が
わずかに上下する。
僕は一種の安心感と
いうべき満足感、
心地よさに包まれた。
そのままずっと。
やはり池には
二人きり。

十二週記念 リマインド

彼女と逢ってから

何週間過ぎたのだろうか？

描いた作品の数も

増えていった。

あの日の紅葉達は

全て落ちてしまつて

乾燥して茶色くなった。

11月の気温は

僕達に冬の訪れを

肌で教えてくれる。

厚着してもなお、

たつ鳥肌はぶつぶつと

僕に非難の声を

投げかける。

寒さは厳しく

息はかすかに白くなる。

夜はさらに冷え込み、

朝には布団を恋しく

させるのだった。

布団に潜り込む前、

電話がかかってきた。

「おう、俺だ。

寝ていたのか？」

電話器のボツボツの

スピーカーから

親父の声が聞こえる。

「いや。」

「ちよつと寝るところ」

欠伸をかみ殺して

僕は頭をかいた。

まだ完全に乾いていない

髪からシャンプーの

良い香りがした。

僕が以前から

お気に入りのお

シャンプーだ。

「12月のはじめの

日曜日は暇か？」

「用事はないけど？」

「じゃあ、空けといて」

「別に良いけど

どうして？」

僕は受話器から

くるくると伸びている

コードを指に

巻きつけた。

「母さんがお前に

会いたいそうだ。

医者にも許可を

もらった」

「ふーん……」

遠い向こうから

悩ましげな声が

聞こえてきた。

「嫌なら無理はするな。」

行かなくても

いいんだぞ。

母さんには都合が

あわなかったと

言っておくから」

「行くよ。別に

嫌ではないよ。

話はそれだけ？」

親父は面をくらったように

「あ、いやそれだけだ」

「明日も早いから

切るね。2時ぐらいに
迎えにきて。

支度しとくから」

「わかった」

親父は冷静に答えた。

「おやすみ」

「ああ、おやすみ」

乾いた部屋に

電話を切る受話器の

鈍い音が響いた。

部屋の奥から

寂しげなクロの

鳴き声がした。

「今いくよ」

クロは布団に

くるまっていた。

僕が布団に入ると

クロも人間と同じように

頭だけ出して寝た。
満足そうな顔だった。

12月に入る前の日曜日。

「今度の日曜日は
用事ができちゃったから
来れないみたい」

彼女は申し訳なさそうに
肩をすくめて

僕から視線をわずかに
そらした。

「僕もなんだ。
だから大丈夫だよ」

「本当に？」
私に気をつかってじゃ
なくて？」

上目づかいで

彼女は僕を見た。

「入院している

母さんの見舞いに
行くんだ」

「お母さん？」

彼女はきよとした。

「お母さん、

どこが悪いの？」

彼女ははっとして

「ごめん。

聞いちゃ悪いよね」

「ううん。いいんだよ。
母さんはちよつとね、

ショックを受けて

少しでも記憶が

なくなってしまうんだ

僕という息子のことも

覚えていない」

僕は彼女から

池に視線を移した。

冷ただけを主張する

水達は鋭い爪をたてて

岸をかきむしる。

目にはそう見えなくても

長い年月を積み重ねれば

やっていることは

そんなものだ。

そつと、彼女の手が

僕の頬を撫でる。

「寂しい？」

彼女の手を握り、

頬から遠ざけた。

「いいんだ。

これは僕のせいだから。

自業自得なんだ」

「本当にそうなの？

本当に寂しくないの？」

彼女の声は僕を

締め付けるように

悲痛な響きをしていた。

「うん、平気」

「嘘だよ。私だったら

寂しいもの。

寂しくて寂しくて……」

彼女は言葉に詰まった。

出てきそうな言葉は

喉で止まってしまい

また心の底に沈んだ。

「私達は似てるね」

「え？」

「何でもない」

にっこりと笑った。

それからまた

普段通りに5時近くまで

二人で池をみていた。

「愛しのマイハニー、

迎えに来たよ!!」

ドア越しにくぐもった

ふざけた声がする。

声の主を確認するまでも
ない。

「ドチラサマデスカ？

シンブンハマニアッテ

オリマスノデ

イラナイデス」

ロボットぽく

返事してやった。

「もう、わかってる

でしょ。パパだよ」

「そのふざけた

キャラ設定止めないと

このドアをおもいつきり

蹴り飛ばすぞ」

「いいじゃん

いいじゃん！！

久しぶりの親子の

再会なんだし」

親父が口をとがらせる。

「運転中によそ見しない」

「ハイハイ」

結局、親父に

キャラ設定を変えさせ、

大家さんにドアを蹴る

のを謝らずにすんだ。

変えなければ

間違いなく僕は

ドアをけり、親父に

ぶつけていただろう。

親父が僕の本気を

悟り、慌てて変えた。

「そんな暴力的な

息子に育てた覚えは

ありません！」

「ハイハイ」

僕はこの間と同じく

車の窓から通り過ぎる

風景を眺めていた。

赤いスポーツカーが

僕達の車の脇を

追い抜いていった。

追い抜いた後には

スポーツカーに

隠れていた後ろの景色が
紙芝居の場面変化のように
すーっと現れた。

親父が瞳だけを目の

すみよせて僕を

見たような気配がした。

「なんかあつたのか？」

僕は外を見たまま

「別に」

とだけ答えた。

「俺の目は

ごまかせんぞ。

だてにお前の世話を

17年もしてるわけじゃ

ないんだぞ。

何があつた？」

「何にもないよ」

親父は今度、

顔をこちらに向けて、

「恋か？恋なのか！？」

恋なら許す」

と一人で盛り上がり、

ついには自分の

昔話まで持ち出そうと

したその時に。

幸運にも病院の

白いのっぺりとした

建物が見えてきた。

「病院だね」

「おお！ホントだ。
父さんのモテ期の
話はまたあとでに
しようかな」

「全く楽しみだ」

僕は親父には
見えないところで
舌を出して吐く真似を
した。おもいつきり
苦笑してやった。

親父は気づいてない。
受付に要件を伝えて、
促されるままに

薄暗いエレベーターに
三度目の搭乗を
果たしたのだった。

病室には母さん一人。
僕達が病室のドアの
ところにいるのに
気がつく

とても嬉しそうな笑顔を
浮かべて手招きした。

「こんにちは」

「こんにちは！！
お久しぶりね。

元気だった？風邪
ひいてない？」

「大丈夫です。
元気いっぱいです」

母さんはまた一段と
元気になったようだ。
この前よりも
顔色はよくなり、
顔も少しだけ
丸くなったような
気がした。
声も滉刺としていた。
「今日は来てくれて
ありがとう。
どうしても話したい事が
あつてね……」
母さんは親父に
目配せした。
親父は頷くと
立ち上がり
「ちよつと売店に
買い物してくる」
と言つて病室から
出て行つてしまった。
母さんと二人きり
なつた。
「聞いているかも
しれないけれど……」
母さんはこうきりだした
「私達はあなたを
養子に迎えたいの。
私はあなた
お義母さん
になりたいの。」

でもね、今まで
他人だった人が
今日からはい、私が
お義母さんね、
じゃいけないと
思うの。だから
私は息子のあなたの
今までの人生を知って
あなた自身をちゃんと
理解したいの。
わかる？」
僕は頷き「分かります」
母さんはホッとした
みたいに手を胸に
当てた。
「わかってくれて
ありがとう。
じゃああなたの
今までの人生を
教えてちょうだい。
何分、何時間、何日でも
かかってもいいから
ひとつずつあなたを
教えてね」

親父から以前聞いた
僕の偽物の過去を
話した。
「僕は生まれたときに
実の母親に孤児院の

前に捨てられました。
それから……」
嘘の過去が僕の
口から他人事のように
流れ出た。
だって他人事だから。
僕の本当の過去では
ないのだから。

僕は本当に弱虫だった。
いつもいつも
泣いてばかりで
幼稚園の頃は
ケンカでよく
泣かせられていた。
つけられたあだ名は
「泣き毛虫」

「やゝい泣き毛虫」
そう言われただけでも
自分が情けなくなり
涙がこぼれた。
家に帰るといつも
目の周りは赤くなって
母さんに慰められた。
「泣き毛虫なんか
じゃないよね。
だから泣かないの。
わかった？」

母さんは僕を抱いて
毎日こう言った。

「わかった。

もう泣かない」

僕は母さんに毎日

そう約束して

毎日破って帰った。

それでも笑顔で

優しく僕の帰りを

待っていてくれた。

小学生になると

泣くことも

少なくなったが

幼稚園から小学校に

一緒入学した同級生から

小さいいじめを

受けるようになった。

低学年のいじめなんて

可愛いものだった。

だけど僕は人が

見ていないところで

泣いた。

母さんには

心配かけたくは

なかったし、また

泣き毛虫と言われるのが

嫌だったからだ。

ある日、一人で

泣いていると

後ろから声をかけられた

「だいじょうぶ？」

これでふいて」

三つ編みのおさげの

同年の女の子が

ピンクの水玉の

ハンカチを

差し出していた。

「ありがとう」

僕はそれを受け取り、

涙をふいた。

「どうして

泣いてたの？」

「みんなが僕のことを

弱虫だ弱虫だって

言うんだ」

女の子はふーんと

他人事のようだった。

「なら私がまもって

あげる」

「え？」

「明日から私が

みんなをちゅういする」

「いいよ」

僕は頭を振った。

「いいからまかせて」

女の子は胸を叩いて

どこかにいってしまった。

次の日から

僕は彼女に守られた。

僕はとても嬉しく。
初めて母さんとの
約束を守ることが
出来た。

だから帰つたらすぐに

「お母さん！！

今日は泣かなかったよ」

母さんのところに

飛んでいき報告すると

母さんは驚きと

嬉しさの混じった表情を

浮かべたが

「頑張つてね」

と抱きしめたあとに

頭をくしゃくしゃと

なでてくれた。

いじめは徐々に

なくなった。

僕は女の子に

ほのかな気持ちを

抱いた。

中学にあがる。

僕も精神的に

成長した。

しかしある日、

再び僕に影が

ついてきた。

暴力には我慢できた。
だけど僕の小さい

記憶を持ち出した
一人が僕のことを
マザコンだと呼んだ。
それはたちまち
他の人にも伝わり、
それについても
いじめられた。

いじめに耐え続けて
卒業間際に僕は
あの女の子に
気持ちを伝えた。
女の子は吹き出した。
「有り得ない。
あんたマザコン
なんでしょ？
無理だわ」

「大丈夫？」
はつと我にかえる。
目の前にいたのは
やはり母さんだった。
「顔色悪いよ。
少し休む？」
いやに冷たい汗が
僕の背中から吹き出して
気持ち悪かった。

「大丈夫です」

「本当に？」

心配そうに顔を

覗きこむ。

誰だっけ？

誰だったか？

他にもこういうふう

に僕を心配する人が

いた気がする。

うまく思い出せない。

「あなたの過去は

よくわかったわ。

お母さんとは…

会えたの？」

そういえば、

僕は母親を

探していたんだっけ？

僕の母親を

探していたんだ。

「母さんとは…

会えました」

僕の声は驚くほど

無機質で乾いていた。

静かな病室にそれは

不気味なまでに残り、

僕の耳にしぶとく

木霊した。

「僕は、僕は…母さんに
会った瞬間に、

感情が爆発して…
酷い言葉を
無防備な母さんに
ぶつけました…」
震え出しだ声は
止まらない。徐々に
大きくなつていった。
「母さんのせいだ！！
母さんのせいで
僕はとても惨めで
いじめられたんだ！！
母さんなんて
もう… いない」
僕は両手で顔を
覆った。
約束したはずなのに。
もう泣かない。
あの日の約束は
まだ続いているはず…
僕の中だけで
母さんは覚えては
いないだろうけど。
「ごめんなさい！！
ごめんなさい！！
僕は…」

弱虫だ。
涙が溢れて
止まらない。

「母さんは僕の言葉で
傷ついて自殺を…」

「ごめんなさい!!」

母さんはベッドから
そつと降りて…

僕を抱きしめた。

「泣かないで」

僕を放すと

暖かな手を僕の頬に

あてて、こぼれる涙を
優しく拭う。

「そうやって

一人で背負って

生きてきたのね。

もうわかったから

泣かないで。

つらかったら

お義母さん一緒に

背負いましょ」

母さんは微笑んだ。

「これからは家族よ」

「戻ったぞ」。

腹減ったから三人で

下の食堂で飯を食べよう」

「いいわね。

いきましょう」

母さんが僕の手を
とって歩き始めた。

「何がいいかな？」

親父が食券の販売機で
迷っていると母さんが

「あなたはどうせ

ラーメンでしょ。

早く選んで」

口を押さえて

楽しげに笑った。

親父は結局、

ラーメンを選び、

母さんはうどんを

頼んだ。

僕も食券の販売機で

悩んでしまった。

「どうしたの？」

あなたはこれでしょ」

母さんがそう言って

押したのは僕が

大好きなコロツケだった。

家族三人が久しぶりに

ひとつのテーブルに

ついた。

くだらない話を

しながら食べる。

そのテーブルだけは

病院の食堂とは

思えない明るい食卓。

母さんはいった。

「早くも本当の家族ね」

いつか母さんに

本当の家族として

みられる日がきて、

同じように食事を

したいなと思った。

「父さん…」

「どうした？」

帰りの自動車。

行きと同じ道だけど、

帰りでは全く別の風景になる。

「母さん、

いつになったら

戻るかな？」

「さあな…」

僕は今日の

母さんを思い出した。

「あなたはこれでしょ？」

一瞬だったけど

僕のことを

思い出したのだろうか？

「早くまた三人で

暮らしたいね」

「そうだな。」

そのほうが楽しいな」

親父は嬉しそうに
目を細めて何度も
頷いた。

「また母さんに
会いに行っても
いいかな？」

親父はふいた。

「何で笑う？」

ブクククと口を
押さえる。

「子供が母親に会うのに
許可なんていらないだろ」

確かにそうだ。

何度も何度も
会いに行こう。

そして早く

思い出してもらって
三人で仲良く

本当の家族になろう。

十三週記念 名も無き記念日

朝食をつくるために
冷蔵庫のところに行く。
冷蔵庫にマグネットで
はられたカレンダーが
冷蔵庫を開けると
残り一枚だからか、
揺さぶられた。
クリスマスイブが
ちょうど日曜日だと、
示している。
今日は二学期の終業式。
いつでも休みは
人をワクワクさせる
魔力をもっている。
心なしか僕も
ウキウキしながら
冷蔵庫を開けた。
真っ先に目にとまった
のは卵だった。
オムレツに決定した。
卵とその他もろもろの
材料を取り出して
冷蔵庫を閉める。
振り子のように
意味もなくカレンダーは
揺れた。

卵を割る。

気持ち良い音が鳴る。

殻は一つも入らなかった
箸でといておく。

フライパンを少し熱して
から油をひいた。

風味がいいから

ゴマ油を使用する。

油がはじける音がする。

そしたら、といった卵を

まんべんなく広げるよう

フライパンにいれる。

フライパンと接する

面の色が徐々に変わり、

ほどよいところで

丁寧かつスピーディーに

オムレツの形に

丸めていく。

できたら、あらかじめ

つくっておいた

茹でた野菜と

チキンライスが

盛り付けてある皿に。

チキンライスのうえに

優しくのせてから

包丁でオムレツの

中心を裂く。

すると花が咲くように

オムレツがひらいて

チキンライスを覆う。

その様子に一瞬
見とれていたが
重大なミスに気づいた。
オムレツじゃなくて
オムライスだ！

ステンレス皿に
キャットフードを
いれるとカラカラと
音になった。
その音に誘われたのか、
こたつの中からクロが
出てきた。
ここ最近はずっと寒いから
こたつに引きこもっている。

僕の足に顔を
擦り付ける。
「はい、どうぞ」
ゆっくり床に置く。
足元でかつかつという
音を聞きながら
僕もオムライスを
食べ始めた。

「ご機嫌よう！！」
学校に着くなり
タイラが優雅に
歩み寄ってきた。
「今日はなんだか

「ご機嫌だな？」

「そうかい？」

「そう見えるのかい？」

「なんかいいことでも？」

「決まっている！！」

「タイラは両手を

大きく広げて

天を仰いだ。

「冬休みだ！！」

「白銀のゲレンデ！！」

「聖夜の誓い！！」

「それは青春だ！！」

「拳を突き上げた。」

「そして僕を指差す。」

「クリスマススイブは

青春を探しに

「僕と固く約束しよう」

「ごめん。ちよつと

無理だわ」

「なんだって！！？」

「タイラは雷にでも

「打たれたかのような

顔をした。」

「先約があると…」

「僕より大事な用か？」

「まあね」

「そう言つとタイラは

「数秒黙り、何かを考えて

「いた。何か思いついた

「ように

「なら、仕方あるまい。
僕は家族と絆を
深めよう」

タイラらしい

自己完結の仕方だった。

体育館は夏とは違い、

足から冷えがくる。

冷たさが異常だった。

ヒーターが全力で

稼働しているが

広いためか、全く

効き目はなかった。

女子の中には震えている

人がいたが、校長は

夏同様お構いなしに

だらだらと話を

続けた。

HRで担任からの

休業中の諸注意を

聞いて二学期は

終わった。

わらわらと生徒たちは

白い息をはきながら

駅にむかった。

僕は家に帰ると

すぐにバイトに行った。

いつもよりか

かなり早い時間だったが

前もって大将には

話しを通していたので

「お疲れ様です」

と入っていつても

「今日も頼むよ」

いつも通りに

迎えられた。

お昼をだいぶ過ぎていた

ので店はひっそりと

していた。

「これから忙しくなる。

それまで下準備を

手伝ってくれ」

奥で女将さんが

手招きしている。

「わかりました」

料理の下準備は

何度かやったことが

あるが女将さんのように

綺麗に野菜を切ったり、

形を同じようには

出来なかったが

「出来るほうだよ。

上手い上手い」

と女将さんから

言われた。

毎日の自炊は

無駄ではなかった。

三人でしばらく談笑を

しているとお客さんが

次々が入ってきた。
6時を過ぎたら
いつものように
満席だった。
ガラガラ。
店に誰かが
入ってきた。
「いらつしゃいませ」
「うーい」
ナカオカさんが
ようやく来た。
いつもの場所へ
案内する。
「ご注文は？」
ナカオカさんはふくと
一息つくと
「とりあえず
生ビール」
オーダーを大将に
伝える。
「ナカオカさん。
ちよつといいですか？」
「なんだい？」
「約束通りに
昼前に取りに行きます。
移動は一人で
できるので…」
そう言うとナカオカさん
「わかった」
と満足そうに

頷いた。

日曜日の午前中。

ようを連れて公園に。

途中でナカオカさんに
会った。

「おじちゃん！！」

ようが元気よく

手を振ると

ナカオカさんも

にっこりと笑い

ヒラヒラと手を振る。

「よう君、

大きくなっただなあ。

どれ、おお！重いな」

ようを抱き上げる。

「よし！今日は

ただでボートに

乗せてやろう！！」

「ボントに！？

おじちゃん！！」

「いいともいいとも。

ホレ、ついておいで」

「やったー！！」

二人してナカオカさんの

あとについていく。

ようはナカオカさんの

隣を歩きながら

学校や友達の話しをしている。

ナカオカさんが
ボートを貸し出している
池についた。

ようは駆け寄って
様々な色彩のボートを
眺めて歩いた。

そしてあとからきた
僕をみて聞いた。

「お兄ちゃん、
何色がいい？」

僕は少し年季を感じる
すすけた白鳥を
指差した。

「これじゃなくて
いいの？」

「それだと子供っぽい。
しかも足で漕ぐから
疲れちゃう」

いっぱしのことを
言うようになった。

周りの子は親にむかって
真っ先に白鳥を
指差しているのに。

「ようの好きな色で
いいよ」

「えゝ。ないんだもん」
ナカオカさんが
苦笑いした。

「そうだ。お姉ちゃんが
好きそうな色にしよう」

ようはそう言つて

白いボートを選んだ。

「さあ、乗ろう」

ようは水に浮かんだ

ボートに飛び乗った。

ゆらゆらとボートが

揺れた。

とりあえず、僕も

乗り込み、オールを

手に取った。

ナカオカさんが

ボートに近づき、

船先を押す。

それからようと二人で

池を一周した。

「このまま持つて
いくかい？」

ボートから降りた

僕にナカオカさんは

そう言つた。

「そうします」

「じゃあ、荷台を

貸すから。

ようも一緒に

お兄ちゃんを

手伝いな」

「何やるの？」

「この白いボートを
向こうの池まで
運ぶんだよ。

荷台の向きを変えるのを
手伝って」

「わかった」

ようは素直に頷いた。

池への道は凸凹。

雑草が生えていて

石ころが車輪の

回転を邪魔した。

とても一人では

出来そうになく、

ようがいてくれて

とても助かった。

「お兄ちゃん、

これどうするの？」

息を切らしながら

ようが尋ねた。

はあはあいいながら

僕は答えた。

「秘密だよ」

「秘密か……」

ようは難しそうな顔を
していた。

池につくとボートを
浮かべてナカオカさんの

思い出にくくりつけた。

これで準備はできた。

時計をみてみると

お昼を過ぎていた。

「ヤバイ！！」

早く帰らないと

大家さんに怒られる。

急ごう！！」

「ばあちゃん

怖いもんね」

ボソツとようは

つぶやいた。

家に帰ると大家さんは

仁王立ちで待っていた。

「おかえり……」

普段とは違う

トゲトゲしい挨拶。

「お昼冷めるわよ」

「「はい」」

二人で池を眺める。

寒さで萎んでしまった

芝生たちが木枯らしに

吹かれる。

「今日の夜空いてる？」

「どうして？」

「見せたいものがあるんだ」

僕がそう言つと

彼女はゆっくり頷いた。

「わかった。」

じゃあ、あなたの

手料理で手をうつよ」

「わかった」

僕が真面目に返事をすると彼女が笑った。

「冗談。あなた

料理できるの？」

「いやできるよ。」

だから楽しみに
しといて」

いつものように5時の

チャイムが鳴った。

僕達はベンチから

立ち上がった。

「買い物」

独り言のように

僕はつぶやいた。

「私も行く」

二人で公園をでて、

近くのスーパーに

入った。

夕食のメニューを

考えながら食材を

選んだ。

スーパーの店内は
クリスマス一色で

クリスマスソングが
楽しげに流れていた。
愉快的店内の装飾は
普段は普通の肉を
全く違うものに
見えてとても楽しかった

「なにを作るの？」

鶏肉を手取る僕の
顔を横から覗いた。

「秘密だよ」

僕は笑った。

大量の食材を

プラスチックのかごに

入れてレジに並んだ。

二人で一緒に食材を
持って帰った。

「ちよつと待って」

大家さんの部屋の前で
立ち止まった。

ノックするとすぐに

ようと大家さんが
出てきた。

「どうしたの？」

「夕飯の買い物は
済みましたか？」

「まだけど？」

「それは良かった。

今日は僕がご馳走を
つくるので部屋に

来ていただけますか？」

「ホントにお兄ちゃん？」

「僕行くよ」

扉をはねのけて

ようは出て行った。

「あらそうなの？」

「じゃあご馳走に

なろうかな」

僕の部屋のテーブルに

三人が座った。

「お兄ちゃん、

手伝うよ」

ようが大きく手を

挙げた。

「いや、大丈夫だよ。

座ってて」

僕は手を洗った。

「ホントに大丈夫？

手とか切らない？」

大家さんが心配そうな

顔で僕を見た。

「大丈夫ですよ。

任せて下さい」

「ガンバレ」

彼女は楽しげに

そう言った。

「頑張るよ」

野菜や肉を切って

下準備したあとに
湯を沸かしたり、
油を熱したりした。
湯気やいい匂いが
部屋に広がった。
出来上がる料理を
次々に皿に盛った。
最後の料理を
盛り付けると
皿をテーブルに運んだ。
「わあ〜」
三人は皿を覗き込んだ。
テーブルには
鶏の唐揚げ、
エビチリ、筑前煮、
豆腐の味噌汁といった
この日には似合わない
和風の料理が並んだ。
「これ全部手作り？」
「当たり前。」
さっ、食べて」
「いただきます」
カチャカチャと
食器と箸の音が
部屋に響く。
外は厳しい寒さ。
中は暖かな明るい食卓。
聖夜には似合わない
日本の料理。
だけでも日本も

世界もどこでも
家族というものは
こんなものだろう。
ただみんなで食事を
囲むことが幸せなんだ。
異変に気づく。
隣にいる彼女が
俯き、肩を震わせている。
大家さんもようも
彼女に目を向ける。
「お姉ちゃん…
どうしたの？
お兄ちゃんの料理に
あたったの？」
僕は一瞬ヒヤッと
したが、彼女が
首を横に振ったので
安心した。
「違うよ。ただ、
嬉しいだけ。こんな風に
家族みたいにごはんを
食べるの久しぶりだから」

顔をあげて
にこりとした。
睫毛がひかる。
「どれもおいしいよ」
ようが頭をぶんぶんと
激しく上下させる。
「うん。おいしい。」

お兄ちゃん、ホントに料理が上手だったんだ」「疑ってたの?」「うん」

素直に答える小学生に思わず苦笑した。

時間は8時30分。
二人は部屋に戻った。
彼女は椅子に座り本棚を眺める。
「じゃあ、行こうか?」
「どこに?」
彼女は僕を見た。
「公園。寒いから上着貸そうか?」
「うん」
二人で部屋から出る。
寒さが骨までしみる。
「さむっ」
フラリと彼女が僕の後ろに寄り添った。
「風よけ」
ニヤリと笑う。
「ハイハイ」
外は暗い。
暗いなかを歩く。
電灯はついているが

冷たい暗さは明るくは
ならなかった。

公園につく。

凍った芝生が

シャキシヤキいう。

葉のない木々は

だんまり。

何も聞こえない。

二人の足音。

ボートが波に合わせて
かすかに揺れている。

ボートの縄をとく。

彼女が恐る恐る乗る。

「ボートって初めて

落ちたらどうしよう」

不安げに言う。

僕が笑う。

「もう知ってるでしょ」

「それイヤミ？」

今は冬だよ。

わけが違うよ」

怒ったように言う。

「そう意味じゃないよ。

どうするかを

知ってるでしょ？」

不思議そうな顔をする。

「じゃあ、どうするの？」

僕は答えずに

オールで岸を押した。

するすると滑るボート。

凍りかけた水は
重そうに砕けた。
バシャバシャと
オールで船を池の
中まで進める。
中まで行くと
オールを船にしまい
船が止まるまで
ゆっくりと待った。
船が止まる。
「どう？上みてみな」
「上？」
顔を傾ける。
雲一つない夜空。
周りには光がない。
あるのは月明かりだけ。
優しく照らすから
星もひよっこり現れる。
街では電気の光に
邪魔されて顔を出さない
のに今日は生き生きしてる。

「綺麗だね。
普段じゃ見れないね。
街は明る過ぎる」
「そうだね」
黙って星を見続ける。
その沈黙がとても
優しく感じた。
時間がゆったりと

過ぎていく。

彼女が口元に両手を
あてて息をはく。

「手袋貸そうか？」

していた手袋をはずして
彼女に渡す。

「ううん」

彼女は手袋を自分の
膝に置いて、僕の手を
とった。彼女の手は
僕より暖かった。

「あったかい」

僕の手のほうが

冷たいのに彼女は言った

「今日は何の日？」

彼女が突然聞いてきた。

「クリスマスだよ。」

多分……」

「クリスマス……」

彼女は空を見たまま
考えているようだ。

「キリストの

誕生を記念する日。

キリスト誕生記念」

「が、どうかしたの？」

「私達、いっつも

日曜日に会つたるからさ

何か記念日みたいに

したいんだけど……

名前がうまく……」

「名前ねえ」

僕も考えた。

「詩人だから

パツとでるでしょ？」

「パツとはでないよ」

冬の寒さの真ん中で
うんうんうなる二人。

実にシユールだ。

数分後、彼女が

大げさに息をはく。

「でないや」

僕も同じく悩んだが
何も出ない。

「名前なんて

いいんじゃない？」

僕がそう言つと

彼女は頷いた。

「そうだね。あとで

決めようか。

今は綺麗な夜空を

見ておこう……

また見れるか

わからないし」

二人ですつと

眺めていた。

水面に揺れる月と星。

遠くにあつても

近くにもある。

不思議な感じ。

手のひらにちらちら

落ちる白い。

「雪だ」

僕はつぶやく。

彼女は手を広げて

優しく結晶を

受けとめる。

僕のはすぐに溶けたのに

彼女のは溶けなかった。

第十四週記念 クロ

打って変わって

6月の下旬になった。

寒さの冬とは違い、

蒸し暑い日々が続いた。

僕は学年が一つ上がり

高校生の最後の1年が始まった。

日曜日の記念日は

名前がないまま

半年が過ぎていたが

二人とも話がまとまらず
今に至った。

部屋を出ると6月とは

思えない暑さが僕を

襲った。反射的に汗が

出た。Ｔシャツがジトリと

僕の肌にへばりつく。

公園には小さな子供は

暑さに負けず元気に

走りまわっているが

それを見守る大人達は

木陰でぐったりと

生気のない目で子供を
みている。

空調がきいている
博物館に人が押しかける
のは言うまでもなく、
駐車場が一杯だった。
クロが珍しく、
来るのを躊躇したのは
暑さのためだろうか？
毛色からいえば
一番暑いだろう。
自分の飲み物とともに
クロ用も持ってきた。
ベンチには麦わらぼうしを
被った彼女が
夏の暑さにも負けずに
笑顔を振りまいていた。
「こんにちは。
暑いね」
「暑すぎてどうか
しちゃうよ」
そつと彼女に原稿を
渡し、座った。
木陰のなかはやはり
涼しく、ありがたかった。
静かなひととき、
セミはまだ鳴いていない。
僕も本をとりだして
読み始めた。
読み終わったのか
彼女が一息吐く。
「喉渴いちゃった。」

自販機行ってくる」

「一緒に行くよ」

同時に立ち上がる。

僕が五歩歩いた。

が、彼女はついて来ない。

何かを探すように

周りをみていた。

「どうかした？」

振り返り呼びかける。

「うん……」

もう一度みてから彼女が

「クロが見当たらない。

いつもなら私達の間

いるのにいないなあ」

って思つて」

僕も周りを見してみる。

確かにクロらしき影は

見当たらない。

「5時には戻ってくるよ。

飲み物買いに行こう」

彼女は一瞬ためらったが

気を取り直して

歩きだした。

5時のチャイム。

しかしクロはいない。

「どこに行つたんだろ？」

彼女が不安げに言う。

僕も不安になる。

「とりあえず探して

みようか？」

二人でベンチの周りから
探し始めた。
湿った草木を
かきわけて、
クワの姿を探したが
どこにもいない。
5時を過ぎても
帰らないのでようが
大家さんの命令で
僕達を呼びに来た。
「お兄ちゃん
ラブラブなのは
いいけど……」
ニヤニヤ顔で来たが
僕が説明すると
サーっと顔色が
白くなり踵をかえして
ダッシュし始めた。
「おい！！どうした！？」
顔をわずかにこちらに
向けて
「ばあちゃんに
伝えてくる！！
ばあちゃんにも
手伝ってもらうよ」
数分後、ようのあとから
大家さんが汗だくで
ついてきた。
「どうしたのさ？
ようが顔色変えて

ばあちゃん来て！！
って言うから……」

困り果てた様子で
僕を見た。

「クロが見当たらない
んです」

説明をした。

大家さんは落ち着いた様子でこう言った。

「そうなのかい？」

まあ猫は散歩が

好きだからね。

そのうち帰ってくるよ。

ある程度探したら

帰って来なさいよ。

7時には帰りなさい」

「わかりました」

僕は頷いた。

二時間公園内をくまなく

探したが結局クロは

見つからず、僕達は

公園をあとにした。

迎えてくれた大家さんは

意気消沈した僕達を見て

「大丈夫、

すぐにお腹減らして

帰ってくるわよ」

と慰めてくれた。

大家さんの読みは

見事に外れてクロは

次の日もまた次の日も

帰って来なかった。
学校から帰ってから
公園に行って探したが
まだ見つからない。
水曜日にはタイラも
駆けつけてくれて
一緒に捜したが
結果は変わらなかった。
大家さんは
迷子の猫のポスターを
作って公園に許可を
もらって公園中に
貼ったが電話は
うんともすんとも言わず
迷惑電話が何件か
かかってきた程度だった。
僕は夜もあまり眠れずに
タイラから心配そうな
目で見られていた。
実際、クロのことばかり
考えて授業もバイトも
身が入らなかった。

クロがいなくなつて
一週間が経っていた。
午前中も公園を探した。
一度家に帰ってから
彼女に会いに行った。
小説どころではなく、
彼女との約束を

初めて破ったような気がした。

報告と搜索で今日は終わってしまうと思った。

運が良ければ、クロが見つかるかも知れないとも思った。

しかし現実には残酷だ。

彼女はベンチに座っていなかった。

おかしいと思いながら

ベンチに近づくと

裏の草影に彼女はいた。

背中しか見えないから

ただ立っているようにしか見えなかった。

猫の泣き声が聞こえる。

クロとは

全く別の泣き声。

しかし似た響きがどこかにあった。

「どうし…」

僕に気づいた彼女はこちらを振り向いた。目に涙をためていた。嫌な予感が僕を愛おしむように撫でた。

草むらをかきわけて
その場所に行ってみた。
そこに広がっていたのは…

ガリガリにやせ細って
飢餓の中地面に身を
あずけるクロの
衰弱しきった姿だった。
目にはもう光がない。
わずかに口を動かし、
鳴いているようだが
全く声になっていなかった。

隣で泣いているのは
クロの母親らしき猫。
この様子はまるで…

「最初みたいじゃない…」
泣きじやくる彼女は
嗚咽に耐えながら
声を絞り出した。

僕がクロに触ろうとすると
母猫は守ろうと
身構えて僕の手を
噛んだ。

それはまるで…
責めているようだった。
この僕を。
痛さが身にしみた。
身だけではなく

心にもしみる痛みだった。
クロを抱き上げて
抱き締める。

僕にはそれしか
できなかった。

顔を近づけると
光のない目で僕を
じっと見つめた。

どこを見ているのだろうか？

その問いが強く心を
打った。

ペロリと僕の顔を舐めて
ニヤアと力なく鳴くと
クロは目を閉じた。

手で土を掘った。
土は濡れていた。
何故だか知らないが
土は乾くことなく
また掘り進めても
乾いた土はなかった。
彼女と二人で掘った。
クロとの思い出が
土から掘り返される
かのように蘇る。
二人で泣いた。
クロの大きさより

ちよつと大きい穴を
掘った。

そこに優しくクロを
寝かした。

言葉を振り絞り

「今までありがとう。

ゆっくりおやすみ」

掘った土を優しく、

クロが苦しくないように

かけてあげた。

5時のチャイムが

哀悼の意を示すかのように公園に鳴り響いた。

クロは死んでしまった。

無言で二人で家に帰る。

足取りは重い。

いつもの道が延々と

続いているかのように

思えた。

やっとの思いでついた。

大家さんのように

説明する。

話し終わると二人は

しばらく黙ったあとに

公園に向かった。

僕達は部屋に戻った。

ドアを開けると

（誰）もいない。

靴を脱いであがる。

他人の家のような感じ。
殺風景な光景。

そこに一つ光もの。
ステンレスの丸皿。
手に取ってみる。
にじんだ僕の顔しか
映らなかった。

僕の問いかけに
答えてくれない。

「……のせいだ」

彼女が近寄り
僕を恐る恐る見る。

「どうしたの？」

僕はステンレス皿を抱き
崩れ落ちた。

「僕のせいだ！！」

僕がちゃんと探せば
クロは…クロは…」

言葉は出なかった。

ただ、昔描いた小説が
頭に浮かんだ。

「クロは結局、

母さんとは会えなかった。

小説なんて…。

現実残酷だ。

ただの絵空事は

残酷で非情なものに
潰されるだけだ！！」

彼女は黙って僕を

みていた。

その表情は哀しげだった。

どこもかしこも

クロがいる。

心がきしむ。

こんなことに

なるのならば…

「会わなければ良かった」

僕が言くと彼女が

息をのんだ。

「拾わずに

会わずにいれば…」

彼女が最初に…

「名前なんて…」

つけないければ

こんなに

悲しまなかった!!」

名前は知ってしまえば

否応無しに他人との

つながりをつくり

自身も他人も縛り付ける。

「違うよ…」

彼女は言った。

「何が違う？」

苦々しく敵意むき出しで

僕は彼女に聞いた。

「違うよ。」

全然違う。

名前があるから

クロはいたんだよ！！

名前がなかったら

死んでいるのと

同じなんだよ！！

辛いのは辛い分以上に

楽しかったことが

あったからでしょ！！

それまで否定しちゃだめ！！！！」

一度深呼吸してから

彼女は言った。

「クロは最後に

お母さんに会えた。

あなたのおかげ。

あなたが小説で願い、

実現した。

あなたに助けられて

一緒に幸せに暮らせて

お母さんと会えて

嬉しかったって

最後クロはそう言いたくて

あなたを舐めたと

思う。 幸せな命だったと

思うよ」

沈黙が訪れる。

「死んだら

何もかも終わりだ」

僕は言う。

彼女はうつむき、

玄関まで歩いて
部屋を出ようとした。
しかし立ち止まった。
「私は向き合うよ。
受け入れるよ。
クロやあなたが
教えてくれたように
クロの死も過去も……」
そう言つて
扉は閉められた。

タイラは僕を
元気づけようとしたが
僕は一切を無視した。
学校も受験勉強も
小説も何もかも
無意味に思えた。
家に帰ると
そこら中に残る
孤独と喪失感と悲しみが
僕を激しく責め立てた。
ようも大家さんも
夕食に誘ってくれるが
僕はすべて断つた。
扉は閉まつたまま。
そのまま一週間。
日曜日だった。
たしかに日曜日だ。
いつもの記念日だ。

だが何かにすり替えられてしまった。

行かなきゃと

思いつつも僕は

動けなかった。

あそこにも

数多くが残っている。

行けば必ず傷つく。

扉はとても重かった。

1時30分。

もう彼女はいるだろうか？

2時00分。

彼女は何をしているだろうか？僕を待っているだろうか？行かなくて…

3時00分。

もう帰ってしまっただろうか？来なかった僕を怒っているだろうか？来なかったから悲しんでいるだろうか？

4時00分。

あと一時間でチャイムが…

チャイムが鳴った。

「お兄ちゃん！

いるの？」

いつもなら扉を叩くようが
チャイムを鳴らした。

「どうした？」

扉は開けずに

鉄を隔てて会話をした。

「お姉ちゃんがね、

お兄ちゃんに手紙を

描いたから届けて

欲しいって」

「手紙？」

扉をちよつと開けて

手紙を受け取り閉めた。

眺めてみると

手紙とは思えない

厚さで封筒が膨らんでいる。

上の端をちぎつて

何枚もの文章を

数分かけて読む。

「……！！！」

僕は手紙を手に

握り締めて

勢いよく部屋を

飛び出して公園に

走って行った。

扉は開けられた。

十五週記念 手紙と…

こんにちは。

急にごめんなさい。

だけと言葉で全部を

伝えることが出来るか

不安だったので

手紙に描きました。

いつもは描いてもらって

ばかりなので私も

一生懸命描かせて

もらいます。

私は感謝しています。

心の底から。

あなたとクロに。

私に再び生きる道を

教えてくれました。

あなたと私が出会った

あの夜、あなたは何故

あんなところに

いたのかを一度は

不思議に思ったはず。

予想はついているでしょ

だからあえて描きません

あなたに命を救われ、

そして心も救われました

私は一歳ぐらいのとき
正確にはわかりません、
病院の玄関に

置き去りにされました。

つまり私は両親を
知りません。

病院で見つかった私は
里親のもとで成長しました。

お母さんとお父さんは
とても優しい人でした。

同時に我が子として
たくさんの愛情を私に
くれました。

とても幸せでした。

お母さんとお父さんと
休日には決まって

どこかへ遊びに行き、
たくさんの思い出を
つくりました。

すすくと育った私は
何の問題もなく毎日を
過ごしてきましたが、
ある日にすべては
変わってしまいました。

仲の良い友達の
何気ない一言でした。

友達は何も意識せずに
言ったのだらうけど
私には深く引つかたのです。

「お父さんと
お母さんとどっち似
なんだろう？
どっちにもあまり
似てないよね」

確かに私は似てません。
それは普通のことですが
私はその当時
二人が里親だとは
知らされていませんでした。

友人の言葉をよくよく
考えてみるとなるほど
私達は似ていません。
そして私はお母さんが
妊娠中の写真や
赤ん坊の私の写真を
見たことがあります。
私にひとつの疑念が
立ち込めました。

お母さんもお父さんも
血液型はA B型。
私だけO型。
それだけでも

充分でした。

「私はホントに
お母さんとお父さんの
子供なの？」

楽しかったはずの

夕食の席が急に

静まり返りました。

私の、せき止めていた

疑念が一気に……

お母さんは表情が

固まり、お父さんは

黙ったまま私を

見ています。

お父さんは一言、

「誰から」

聞いたんだ？

「自分で調べた。

血液型で……」

ああ、そうだったのか。

私はやはり。

そうか、とお父さんは

肩を落としました。

「いつかは

話さなければと

思っていたが」

私は震えだしました。

寒いとか怖いとか

そういったものでなく、

ただ震えました。

「じゃあ私はホントは

お母さんとお父さんの
子供じゃないの!？」
私はお父さんに詰め寄り
両肩をつかみました。
私を支えていた、
私をつくっていたものが
壊れていく音がしました。
「どうして黙ってたの？」
私はお父さんを
激しく揺さぶりました。
「いつかいつかと
考えている内に
長引いてしまった。
お前にはすまないと
思っている。すまない」
「そんな…」
目の前が真っ白に
なりました。
それまで固まっていた
お母さんが駆け寄り
「お母さんたちは
血はつながって
いなくともあなたの
お母さんお父さんよ」
お母さんの目は
定まっておらず、
信用に欠けていました。
当時の私はそう
思いました。
お母さんの瞳ではなく

むしろ

「血が繋がってない」

の一言が心を傷つけて

私を決定的に

打ちのめしました。

涙は頬を洗い流し、

綺麗なフローリングに

一点のしみをつくりました。

「私の…私の正確な

誕生日はいつ？

私の…私の本当の

名前は何なの？」

二人とも答えません。

答えることができません。

お父さんが

私の生い立ちを

静かに機械ごとく

冷たい口調で

話し始めました。

椅子に座り

うつむきながら聞く私は

心のどこかで

決めていました。

家を出る。

早朝。誰にも知られず

家を出ました。

住むところや仕事を

決めました。

家から自分の貯金と
通帳を持ち出したので
何とかなりました。
学校へは行かず、
仕事をして独りで
暮らし始めました。

家に帰ると真つ暗な
冷えた部屋が待つだけ。
愛情に困らなかった
今までの生活との差に
私は耐えられませんでした。

温かい家庭にはもう
戻ることは許されません

自分の家といえるのは
独りきり、孤独を
固めて押し込んだような
部屋だけ。
私は居場所が
なくなりました。

名前がない私。
生まれたときが
わからない私。
居場所がない私。
両親がいない私。
私しかない私。
その私ですら、

輪郭を失い、
はつきりとしない。
不安の中。

ある日、私は
部屋に帰らずに
この公園にきました。
池は静かに
私を誘いこみましたが
一歩のところで
阻止されました。
そして次に会った時、
私はあなたに聞きました
「どうして私は
あなたに会ったの
でしょうか？」
その問いにあなたは
何の意味のない一言
だったのだろけれど
「僕があなたを
必要としたから」
この一言に私は
救われました。
そしてあなたは
私に居場所をくれました。
私のたったひとつの
居場所。このベンチ。
日曜日は私の記念日。
あなたと私。
もちろんクロもだけど。

お互い名前を知らない。

何も知らない。

生い立ちも

誕生日も

何が好きで何が嫌いでは…

それでも日曜日は

私達を繋げた。

繋がった。

ありがとう。

名も無い私に

何も聞かずに

何も求めず

ただ繋がってくれた。

名も無い記念日は

私にとってかけがえの

ないものだった。

クロが死んでしまった。

三人の記念日では

なくなってしまった。

だけどクロは教えてくれた

私に何が大切なのかを。

仮の名前でも

生まれを知らなくても

私は周りの人が

私なんだって。

描いてる自分を

分らないけど

そういう事なんだって
クロは教えてくれた。
あなたも私の一部で
私もあなたの一部。

自分がどうであれ、
私は私で私でしかなくて
大切な周りの人が
居てくれて幸せだな
って思った。

よく分からないね。
とにかくありがとう。
私は幸せを自ら
放棄してたんだな。
私が見つかったから
これ以上甘えてられない。

だから…ありがとう
さよなら。

全速力。
握りしめた手紙。

汗が流れる。
走って走って走った。
（間に合え！！）
公園はいつものように
僕を迎えた。
いつもとなんら
変わらず。
公園を駆け抜けて
池を見渡す。
切れた呼吸を必死に
押さえつける。
ポツンと独りきりで
ベンチに座っている人が
見えた。
ゆっくりと呼吸を
整えながら近づく。
相手もこちらに
気づいた。彼女は白いワンピースを着ていた。
彼女の前に立つ。
まだ鼓動が激しい。
二人は見つめ合った。
二人とも何も言わない。
（何か言わなければ、
そのために走ってきた。
なのに言葉が出ない）
口を開きかけた瞬間
五時のチャイムが鳴る。
彼女は静かにベンチから
立ち上がると
クロの墓に一度

手を合わせてから
離れようとした。

僕のわきを何も言わず
通り過ぎた。

数歩して僕は

振り返り彼女の手を
掴んだ…はずだった。

確実に手を掴んだはず
なのに掴めなかった。

まるで…

僕はそのまま

彼女の後ろ姿を

見送ることしか

出来なかった。

僕らには呼び止めるための
名前がなかったから…

伝えたいことが
あったのに…

エピソード

それから一週間後、
淡い期待を胸に持ちつつ
ベンチに行ってみたが
やはり彼女はいなかった。
5時まで待ったが
現れず僕は家に帰った。
夕食を大家さんと
ようの三人で食べていると
大家さんがこんな話をした

「今日の朝4時ぐらいに
公園の池から死体が
あがったみたいよ。
死後一年ぐらいって」
ようは立ちあがり、
「お兄ちゃん！！
やっぱりあそこには
幽霊出るんだよ！！
あとで見に行こう！！」
大家さんがダメだと
ように厳しく言った。
僕は上の空で二人の話は
全く耳に入ってなかった
そこで電話が鳴った。
大家さんが立ちあがり

電話にでる。

「もしもし？ああ！！
いますよ」

視線を僕に移す。

「え？ええっ！！？」

ホントに！！今変わります」

大家さんは手招きして

僕に電話を押し付けた。

「もしもし？」

「変わったか……」

親父だった。

「どうしたの」

「母さんが……」

母さんが……記憶を

取り戻したぞ！！！！」

親父は叫び声をあげた。

鼓膜が破れそうになった

「えっ！？どうして急に」

「わからん！！」

だが夢から覚めるように
思い出してな」

受話器の向こう側の

親父は小躍りしている

みたいだった。

「医者もびつくりだ。

とりあえず今日は

遅いから明日迎えに行く
じゃあな」

電話は一方的に切れた。

大家さんは満面の笑みで僕をみていた。

僕は日曜日に公園へ

行かなくなった。

心の空っぽな部分を

埋めようと受験勉強に
がむしゃらに気持ちを
注いだ。

第一志望は無事に合格。
文学部に入った。

夢だった作家を目指し

出版社に何度も

描いては持ち込みを

したが言うことは何故か
どこも同じだった。

「才能はあるが

何かひとつ足りない」

その何かひとつが

わからないまま僕は

夢をあきらめたが

編集者になった。

何かひとつを探すため。

一体何が足りないのだろう？

そして現在。

懐かしい元我が家。
ノックしてみると
中から長身で
整った顔の男子が
出てきた。

「兄さん！！」

よく来たね」

「久しぶり！！」

ようもデカくなったな」

「ちよつと待つてて

ばあちゃん呼ぶよ」

数分後、変わらずに

元気そうな大家さんが

ように連れられてきた。

「お久しぶりです」

「よく来たね」

久しぶりに昼でも

一緒に食べない？」

「ご馳走になります」

ニヤリとようが

笑った。

「ようは将来

何になりたい？」

久しぶりの大家さんの

手料理はうまかった。

食べながらように聞くと

意外な答えが

「作家」

「どうして？」

「兄さんが小さいとき

描いたのを読ませて
くれただろう。

俺もこんな風に

描きたいと思っただ」

「ほう」

我ながら感心した。

ようがそんなことを

思っていたなんて

分からなかった。

僕の作品も捨てたもんじゃなかったわけだ。

「兄さんは……」

僕の方を向き直った。

「出版社に入って

編集者やってるんだろ？」

「そうだ」

「まさかあきらめた訳じゃないよね？」

「……」

「もったいないよ。

兄さんは良い作品が

描けるんだから

編集者じゃだめだ。

編集者も良い仕事だけど

描ける人が描かなきゃ

ダメなんだよ」

僕は黙ったまま

ようの話を聞いた。

「ごめん。」

言い過ぎた」

「いや、いいさ。」

お前の気持ちは
分かるかもしれない。
逆の立場ならそう言う。
ただお前が言うように
俺には才能はないよ。
全くもってこれっぽちも」

「兄さんは、ねえさ…！
何でもない…」

それで話は終わった。
時計をちらりと見た。
僕は立ち上がり

「ごちそうさまです。
ちよつと出掛けてきます」

と言って大家さんの
部屋を出て歩き出した。

変わらないあの場所へ。
ベンチはそこにあつた。
大きな木も空も池も。
腰をおろしてみる。
眺めもあの時のまま。
停止していたかのように
いつもと同じ風景。

ただあの時と1つ違うのはベンチには一人しかいないということだ。
ただ人一人がいなくて僕には違う風景に見えた。彼女がよく見

上げたこの青空。

立ち上がり、

線香とライターを

取り出して火を

つける。クロの墓に

置いてやった。

少しの間手を合わせて

目をつぶる。

目を開けてから

少し微笑んでしまった。

「ただいま……」

ニヤーとどこからか

聞こえてきそうだった。

再びベンチに腰を

おろす。

何もない。ただ時が

たくさん過ぎただけ。

何かが足りない。

たったひとつだけ。

微かな音。

芝生を踏み鳴らす

微かな音。

芝生は痛みに

身を縮ませているに

違いないだろう。

音が大きくなり、

止まった。

ベンチに一人

ポツンと座っている僕。

「あの、隣に座ってもいいですか？」

名も無き記念日。

僕達の記念日に

名前はいらない。

何故？

二人とも忘れてしまったからだ。

その名前は二人の

もう伝え合うことの

出来ない言葉。

名も無き記念日。

毎週日曜日。

池では時が止まったまま

誰かと誰かの想いと

繋がりが飾られている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2102q/>

名も無き記念日

2011年7月31日22時00分発行